理事長登壇（13）

久留米市（福岡）協会理事長
長野 農夫男

久留米市に協会が誕生したのは昭和四十四年で、今年で満五才の幼児というところです。

協会発足前（昭和三十一年頃）明善高校（女子）がインターハイあるいは国体においてはなばなしい活躍をし、（読者の皆さんには福岡県明善高校といえば、記憶にあることと思います）その刺激を受け、一般・高校のチームが集まり、親善試合や練習試合で県大会の間をつないでおりましたが、組織なしでは大会運営及びハンドボールマンの継続的育成ができないところから、副会長の荒木英之氏（明善高校）、同古賀信男氏（ブリヂストンタイヤ）と私三人が発起人となり、高校の先生方及びOB・OGの代表者と準備会をもち若きハンドボールマンの育成を図りこれと普及を目的に結成の運びとなり、市体育協会に加盟申請したところ、市体育協会理事会において満場一致で認められ、早速第一回大会（四十四年四月）を皮切りに年に春・秋二回の大会をもち現在に至っております。

発足当初は、高校五チーム（男二女三）、一般五チーム（男四女一）で大会を開くには誠に淋しい感じのチーム数でしたが、年がたつにつれ他地域からの参加申込みがあり、現在では久留米市選手権大会ではなく、〝福岡県南部地区選手権大会〟のような規模になって参りました。お陰で参加チーム数もふえ、大会も冬期に室内総合選手権大会を加え、又年に一～二回市教育委員会主催によるハンドボール教室を行う等、一段と年間スケジュールも締った感じがします。特に室内大会ともなるとママさん選手の参加も見られ、子供達の声援にこたえて一生懸命にプレーするなごやかな雰囲気のうちに年度の大会を締めくくっております。当市では今のところ余りチームの増加は見られませんが、各指導者の適切な指導により、昨年は久留米工業高校（男子）の九州大会第三位、県大会優勝、明善高校（女子）の県大会上位入賞、ブリヂストンタイヤ（一般男子）県大会準優勝と着々としてその成果が実ってまいりました。

加盟チームの活躍は当協会にとって誠に喜ばしいことですが、目的の第一である底辺拡大についてはまだまだの感じがします。機関誌等で他地区での小・中学生のハンドボール教室参加、並びに活動ぶりを見る度にうらやましく思われ、又余暇の増大によりOB・OG連が次々と姿を消していくことは誠に残念でなりません。反面では、ブリヂストンタイヤ（株）が社技としてハンドボールを取り入れ、又当市駐とんの自衛隊でも職場対抗試合が年々盛大に行われるようになり、これらチーム（職場毎）の参加対策として二部制創設を考慮し、年間を通じてハンドボール教室を開催することにより、小・中学生の導入を図り、底辺拡大に微力ながら尽くす所存です。

最後に日本協会への要望を申し述べます。

第一にテレビ放映によるPR

他の球技に比べ、ハンドボールを知らない人が多いのではないだろうか？

他の球技の大半が実業団リーグ等でテレビ画面をにぎやかしファンの増加をたどっているが、それにひきかえハンドボールのテレビ放映は少ない感じがする。

国際試合、全国的大会は勿論、実業団上位チームによるリーグ戦の企画、又これらの放映によりPRしていただきたい。

又前記大会の地方開催、巡回指導等により地方へのPRを兼ねレベルアップを図る。

第二にクラブ全国大会の企画。

以前は全日本選手権又は国体等にクラブチームとしての出場が大半で実業団創立以後この種チームの極減によりOB・OGのハンドボールからの離脱が見られる。これが全国大会の企画により余暇活動（ハンドボール）の復活、あわせて健全な社会人の育成を図れる。

第三に中学校への経験者の就職指導。地区により小・中学生活動の活発なところはあるが、全国的には他球技に比べ低調であり、これら経験者の就職により中学校活動の誘導ひいては高校又は一般社会での活動による底辺拡大を図る。

社会人となると多くの者がハンドボールから離脱していく現在、先般来日したラインハウゼン（西独）のようなクラブチームが多く誕生し、生涯ハンドボールを愛し、末長くプレーし、健康維持増進に精進する姿こそ我々の望むところで、これが実現に努力することが日本協会の今後の問題でもあり、社会的責任ではないだろうか？

（了）

「ハンドボール」

49年3月号（第117号）目次

【表紙写真】第8回世界男子選手権アジア予選・日本×イスラエル2回戦（2月17日、テルアビブ）＝全日本選手団撮影

日本、苦戦の末 本舞台へ進出
～世界男子選手権アジア地域予選～
イスラエルと1勝1引き分け

若く新しい全日本は、苦しみながらも貴重な経験をつみ、アジア代表として世界選手権へ駒を進めた——第8回世界男子選手権アジア地域予選・日本×イスラエルの試合（2回戦制）は、日本がテルアビブに遠征して2月14、17の両日、同地のスポーツスタディアムで行われ、日本は第1戦二転三転の末14—13のリードを守り切れず、引き分けに持ちこまれたが、第2戦は前半なかばすぎから優位に立ち18—14で快勝、1勝1引き分けとなり、2月28日からベルリンなど東ドイツ11都市で開かれる本大会への出場権を得た。日本の出場は5度目。

日本は、19日テルアビブを発ちユーゴスラビアで調整、親善試合（2試合＝本誌24頁速報）のあと25日東ドイツ入りする予定。

残り90秒
終盤、同点に追いつかれる

第1戦は2月14日午後9時から八千をこす大観衆を集めて行われた。

審判＝シャルガヌー、シデア（ルーマニア）

日本 14（6—6、8—8）14 イスラエル
引き分け

得	【日本】		【イスラエル】	（身長）	得
0	本田	GK	セラ	190cm	0
0	柳川兄	GK	ルッソ	178	0
2	蒲生	FP	ガルフェンド	185	1
0	菊池	FP	ホフマン	180	0
0	木野	FP	ヴァンゲルビッチ	180	1
3	中井	FP	レフラー	186	1
0	大江	FP	マドモニ	180	0
6	藤中	FP	ガルゾン	186	0
0	花輪	FP	ヨシフォビッチ	186	2
2	佐藤	FP	テネンバウム	176	0
1	村田	FP	ビアリック	183	6
0	柳川弟	FP	アルベルマン	178	3
14	（1）7MT		（4）		14

後記　北川勇喜（全日本監督）

○……戦争に傷つきやるせない気持ちのイスラエルの人々にとっていちどは来ないと伝えられた日本の若者が姿を見せ、しかも「実力伯仲」という前評判も手伝って大体育館（収容力一万人）はほぼ満員の盛況で、その熱狂的な応援はすさまじく、ベンチからの指示はもちろん、レフェリーのホイッスルさえ聞きとれないほどだった。

○……キャリアに不安の全日本は最初の1点を早く奪い気持ちをおちつけたいところだったが、イスラエルの一線ディフェンスを突き破れず、中井（大同製鋼）が先制点をあげるまでに8分もかかった。それまでの間に6回の攻撃機があったが、シュートがバーに当るなどで逃した。

イスラエルは、ポストに一人を入れ、それほど速くはないが一人々々が小刻みな動きからシュートチャンスをつかもうとローリングを繰り返す攻撃を示した。

○……日本のディフェンスにとって、この攻撃はさほど恐しいものではなかったが、12分わずかなスキをアルベルマンのステップシュートでつかれ1—1。

日本はこのあと17、19分に藤中（大同製鋼）の速攻とロングが決まったのだが一気に追加点をつみあげられず、逆にイスラエルの反撃を許し24分3—3。村田（法大）、ヨシフォビッチの巧技の応酬など一進一退から29分7MTで6—5と日本は初のリードを奪われたが、ハーフタイム寸前藤中でタイとして前半を終えた。

○……後半、イスラエルはいきなりヴァンゲルビッチがロングを決めたが、日本も2分蒲生（中大）がロング、さらに7分フォーメーションから蒲生がゲットして8—7と五たび先行した。

しかし、いちだんと激しさを増した観衆の声援にまどわされ消極的となりどうしても主導権を握れず、菊池（早大）の退場や7MTの失敗などで13分間無得点、この間にイスラエルは日本の一線防禦をついてポスト、速攻と、2本の7MTで15分には11—8とリードした。

イスラエル、一時は3点のリード

○……3点差のまま残り10分となり、日本は苦境に立たされたが思い切ったチェンジメンバーで攻撃重点を採り、ディフェンスも1・5に切り替えた。20分になって7MTを藤中が決めてから、にわかに動きが滑らかとなり20分ビアリックに1点を奪われたが22分30秒藤中、23分佐藤（本田技研鈴鹿）が相次いでロングを決め、24分には速攻から藤中とたたみかけて同点、25分中井のゲットで13—12と逆転、勢いにのったと思えた。

○……イスラエルも粘り強く26分ビアリックが割りこみ13—13、日本は28分佐藤のロングで14—13と今度こそ勝負を決めたかにみえたが、30秒後ポストプレーのつぶしを7MTにとられビアリックがゴール、9度目のタイスコアとなった。残り90秒の攻撃に日本はすべてを託したが、中井のロングがはずれタイムアップとなった。

○……全日本一線防禦はを採ったがイスラエルのじりじりと攻めつけてくるローリングオフェンスをこらえ切れずとび出しては、ポストを狙われての失点を重ねたのが痛く、突きはなすチャンスを逃したため勝利をあげられなかった。

攻撃面でも、秘かに行った練習を採りいれられ、研究のあとのみえるディフェンスで封じこまれたことと、ベテラン木野（湧永薬品、コーチ兼任）がつぶされ無得点だったのも誤算であった。日本のシュート数は40。

（編集部注）アジア予選第1戦の経過は一部で、終盤リードされていた日本が、辛くもタイム寸前14—14の同点に追いついたと報じられたが、実際はその逆であったようだ。

木野の大記録ストップ

全日本・木野実選手（FP、湧永薬品、立大出）は、この試合ポストマンとゲームメーカーに廻ったため無得点に終わり、41年9月の中国戦（駒沢）以来41試合にわたってつづけていた公式国際試合連続得点記録がついにストップした。国際的には、本誌の調べではGグルイア（ルーマニア）の103試合連続がある。

ベテランが活躍、後半一気

第2戦は2月17日午後8時から五千五百の観衆を集めて行われた

審判＝シャルガヌー、シデア（ルーマニア）　＝個人記録は4頁

日　本 18（10－7 / 8－7）14 イスラエル

後記　北川勇喜

○……日曜日の夜、イスラエルでは初めて、それもゴールデンアワーに全土へのテレビ中継があるため観客の出足は鈍く、スタンドは空席が目立った。しかし応援のはげしさは変わらず騒然たる雰囲気のうちに試合開始。

両チームとも動きはよくイスラエルは3分ホフマン、日本は3分40秒佐藤で互角のすべりだし。イスラエルは4分マドモニが決めてリードしたが、日本も柳川弟（大同製鋼）が8、9分連続ゲットで3－2。このあとは一進一退をつづけ15分4－4と拮抗した。

○……イスラエルは16分ホフマン、18分7MT（ビアリック）、22分アルベルマンと連続得点して6－4、場内を沸かせた。

しかし、日本は、木野が第1戦の沈黙を一気に突き破るように積極的な仕掛けで23分から26分までに連続3ゴール、この活躍で態勢を立て直した。

イスラエルは27分得意のポストから1点を返したが、日本は28分7MT（藤中）で優位をキープ、29分中井、29分30秒木野で3点差

世界選手権へ乗りこむ全日本男子

夏目　真治

藤中　憲二（主将）

林　達夫（団長）

菊池　悟

佐藤　要二

北川　勇喜（監督）

村田　幸男

中井　武三

木野実コーチ兼選手

柳川　実（弟）

大江　隆夫

本田　洋

蒲生　晴明

花輪　博

柳川　清（兄）

"アジア軽視"のいましめ

…イスラエル戦の反省…

□……キャリア不足を心配された若い全日本が、そのハンデをみごとにはね返してイスラエルを破り、東ドイツ(世界選手権)行きの切符を手にしたのは絶讃に価するが、一方で、今回の苦戦は関係者の間にさまざまな波紋を投じているようだ。

□……実は、今回ほど全日本の周辺に"悲観材料"が並べられたことはない。

日本がガラリとメンバーを代えたのに対し、イスラエルはピアリック、レフラーの両エースをはじめホフマン、GKセラらミュンヘン五輪予選（46年11月、東京ほか）時の主力7人が健在、しかも日本には「乗りこみの不利」もあった。

□……国内事情にも相異がみられた。イスラエルはこの予選を"建国25周年記念事業"の一つに組み入れるほどの熱のいれよう、一方の日本はチーム編成が昨年くれという出足の遅さに加え、行く、行かないの騒ぎ（＝本誌前号既報）で、合宿は1月末の1回だけ。選手に与えた動揺も目に見えぬハンデといえた。

□……第1戦辛くも引き分けの報道は、関係者、ファンの"悲観""心配"をよけいつのらせたようで、第2戦当日日本協会の電話は、結果の問い合せで鳴りっぱなしだった。このようなことは事務局にとって初めてだ、という。

□……苦戦の原因はいろいろあろうが、いちばん問題なのは「アジアならいつでも勝てる」というムードが斯界に流れていることだ。

男女ともこれまでのように予選なしでストレートに世界選手権（オリンピックを含めて）へ出場するケースはもうないだろう。安易な"アジア観"は禁物である。

□……激しい闘志を燃やす韓国、意欲的な台湾とインド（IHF準加盟）、それにイスラエルもある程度の自信を得ただろうし、ナショナルが4連敗している中国が登場してきたらどうなる…。

"世界のベストエイト"もよいが、それよりもアジア軽視の風潮をいましめるほうが先決だ。アジア地域で敗れ桧舞台を踏めぬ惨めさは味わいたくない。モントリオール五輪の予選（男）は来年に迫っている—。（X）

得	【日本】		【イスラエル】	得
0	本田	GK	セラ	0
0	柳川兄	GK	ルッソ	0
7	木野	FP	ヨシフォビッチ	1
4	佐藤	FP	ピアリック	5
2	中井	FP	ホフマン	3
3	柳川弟	FP	アルベルマン	1
0	大江	FP	レフラー	0
2	藤中	FP	マドモニ	1
0	蒲生	FP	ガルゾン	0
0	村田	FP	ヴァンゲルビッチ	1
0	花輪	FP	テネンバウム	2
0	菊池	FP	ガルフェンド	0
18	(1)	7MT	(4)	14

をつけた。

○……この日の日本の守りは、イスラエルのローリングからポストという常套手段を防ぐため未消化の一線防禦をやめて、柳川弟をトップに置く「変型1・5」で応じまずまずの前半だった。

攻撃面では、ダブルポストをとると動きが固まりすぎるためサイドから中央に振って勝負する策戦で臨み、木野の復調でこれは奏効した。

○……後半、日本は一気に大勢を決めるべくスパートしたが、かえって気負い、いきなり7MTを奪われたあと3分ヴァンゲルビッチにポストから決められ1点差と詰められた。

3分30秒柳川弟で11—9とはなしたが、イスラエルは5分ピアリックのゲットで反撃の望みを残した。

○……日本は、第1戦の失敗（13分間無得点＝前掲）にこりて、果敢に攻めこみ、これが実って6分佐藤、7分木野がインターセプトから独走してゲット、11分にも木野がみごとなシュートを放って14—10とした。13分1点を失ったが15分佐藤、17分木野が射ちこんで16—11。

イスラエルも必死に攻めて18分ホフマンが得点をあげたが、日本もすぐ佐藤、中井となだれこんで20分には18—12と「東ドイツ行」を決める大量リードを奪った。

○……守っても、日本はそのあと2本の7MTによる失点にとどめた。

欧州遠征経験者が4人と少なくすべてに若さがもろさとなって現れた2試合だったが、それだけにこの勝利は貴重である。

攻防のバランスさえ立ち直ってくれれば本大会でもかなりの活躍が期待できる。

また、佐藤を攻撃専門にし、守りには別の選手を起用する策戦も一応軌道に乗っている…。

会長・副会長往来

日本協会田村正衛会長と林達夫副会長（遠征選手団々長）はイスラエルでの保安と会場視察などのため1月30日から2月3日までテルアビブに滞在、在イスラエル日本大使館、イスラエル協会、同スポーツ関係者などと打合せを行った。田村会長は2月4日帰国、林副会長はそのまま居残り8日北川監督ら選手団と合流した。

田村会長の話　イスラエル国内は極めて平穏で、日本が辞退を翻して参加に踏み切ったことを大変喜んでいた。市内各所に試合のポスターが張られ、タクシーの運転手からも「日本は強いか?」とたずねられたほどだ。

滞在中、シンガポールの事件（給油所襲撃）が起きたが動揺はなかった。ただ、往復ともテルアビブ空港で乗り降りした人は7、8人にすぎず日本人は私一人で一まつの不安を感じた。

◇

日本協会渡辺和美副会長（IHF理事）は予選のIHFウィットネスとして2月13日から17日までテルアビブを訪れ、19日帰国した。同氏は26日夜東ドイツ（本大会）へ出発する。

渡辺IHF理事の話　大会の運営、日本に対する受け入れとも申し分なかった。

孤立感を味わっていたイスラエルへ日本が遠征したことは現地の人たちにうるおいをもたらしたようだ。

日本の試合ぶりは若さがのぞき思い切ったメンバーの切り替えが裏目に出て、さしてレベルアップしたとは思えぬイスラエルの食い下りを許していた感じだ。

世界選手権 2月28日開幕

第8回世界男子選手権は、アジア代表に日本が決まり、参加16ヶ国が勢揃い、2月28日から3月10日まで東ドイツのベルリンなど11都市で行われる。

本誌既報のとおり日本は予選リーグC組で東ドイツ（ミュンヘン五輪4位、前回2位）、ソビエト（五輪5位、前回9位）、アメリカ（五輪14位）と顔を合せる。

北川監督は「優勝候補の呼び声高い東ドイツには不利としてもソビエト、アメリカから勝ち星をあげベストエイト（準決勝リーグ）へ進みたい」とアジア予選に出発する前から話していたが、最近の成績をみていると、ソビエトも東ドイツとほぼ五角の実力で、この見通しはかなり苦しいといわなければならない。

さらにアメリカのレベルアップがめざましく、IHFの一部では、この大会を機に「アジア―アメリカ」の立ち場が逆転するのではないかとささやかれているという。

日本は、モントリオールに備えてメンバーをがらりと代えたが、期待の若手が、まだじゅう分にヨーロッパでの試合に、持ち味を発揮するに至っていない。イスラエル戦から引きつづきの転戦による疲れも気になる。

日本が世界選手権へ参加するのは第4回（昭36）以来これで連続5回目だが、かつてない苦戦を強いられそうである。

こうした状況の中だが日本協会荒川理事長は「今回の布陣はあくまで2年後のモントリオールへのステップ、高望みはしていないが、少くとも前回の10位、ミュンヘンでの11位というこのあたりの線は確保して欲しい」といっている。つまり、予選リーグでの1勝は〝絶対の条件〟なわけ。

アメリカはバスケットボールからの転向者が5人おり、ヨーロッパのハンドボールになれた目にはかなりトリッキーに見えるプレーをくりひろげる。日本が得意の速攻と、粘りのある守りを示せば過去2戦2勝（21―15、20―16）の実績から推しても楽な相手なのだが――。

イスラエルに苦しんだあげく代表権を握り、若い全日本はかなり気をよくしており、勢いにのっているのではないかと明かるい見通しをたてる人も少くない。期待をもって見守ることにしよう。

なお、優勝争いは前号既報のように東ドイツ、ソビエト、チェコ、ルーマニア、ユーゴなど東欧圏諸国によるものとみたい。（杉）

○…予想される3国のメンバー（本誌調）…○

【東ドイツ】GKボアト、ボスク、FPガンシュフ、ハイルドブラント、ロスト、ラケンマッハ、ボーム、エンゲル、ピエック、カーラート、シュミット、

【ソビエト】GKシチュエフ、コシエルギン、FPマキシモフ、クリモフ、パノフ、チカライエフ、レザノフ、ウサティ、ラグティン、グリエフ、ストリヤノフ、マショリン

【アメリカ】GKリブニヤク、オゾリオ、FPマシュウズ、アブラハムソン、スパークス、ウレム、ナイロール、ハルディマン

第8回世界選手権 予選リーグ組み分け

▽C組（日程）

2月28日(木)　日　本―東ドイツ（17時30分）
ソビエト―アメリカ
（ベルリン）

3月1日(金)　東ドイツ―アメリカ
日　本―ソビエト（20時）
（ブランデンバーグ）

3月3日(日)　日　本―アメリカ
（17時，ブランデンバーグ）
東ドイツ―ソビエト
（ベルリン）

▽A組　チェコ，西ドイツ，アイスランド，デンマーク

▽B組　ルーマニア，スウェーデン，ポーランド，スペイン

▽D組　ユーゴ，ハンガリー，ブルガリア，アルジェリア

準決勝リーグ組み分け

▽1組　A組1，2位，B組1，2位

▽2組（日程）

3月5日(火)　C組1位―D組2位
（シュエリン）
C組2位―D組1位
（マグドバーグ）

3月7日(木)　C組1位―D組1位
（ベルリン）
C組2位―D組2位
（デソー）

9～12位決定リーグ

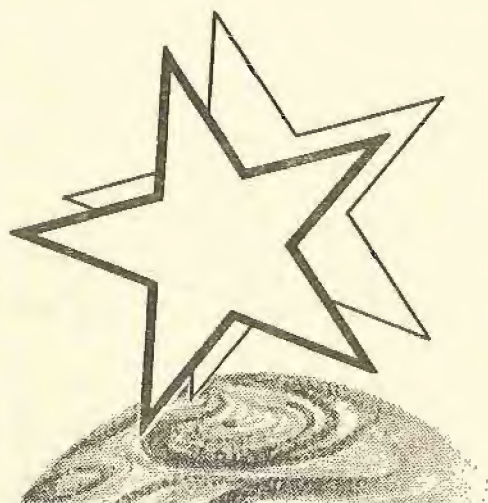
～予選リーグ各組3位～

3月5日(火)，7日(木)，9日(土)
（ビスマールほか）

順位決定戦

3月9日　7位決定戦，3位決定戦
（ベルリン）

3月10日　5位決定戦，決勝戦
（ベルリン）

（注）今回は13～16位決定戦は行われない。

IHF理事 ヴァドマーク氏に聞く

日本協会が、中東情勢への不安からいったんは第8回世界男子選手権アジア予選棄権を内定（本誌前号既報）したことはIHF（国際ハンドボール連盟）筋に思わぬ波紋を投じたようで、最高幹部の一人、カート・ヴァドマーク常任理事（58才、行事委員長、スウェーデン）が日本側の事情聴取とIHFの姿勢説明のため、東京へ派遣された。

日本協会は、1月26日午後、東京渋谷の体協内「スポーツマンクラブ」で円村正衛会長、渡辺利美副会長（IHF理事）、荒川清美理事長、滝口三郎、杉山茂常務理事らが同氏を迎え、約2時間にわたって今回の問題や、今後のIHF事業について話しあった。

以下はこの会見におけるヴァドマーク氏の談話（要旨）である。

カート・ヴァドマーク
IHF理事

日本の「アジア予選棄権」の動きとIHFの態度

——日本が、今回の世界選手権アジア地域予選を棄権することになりそうだ、という情報を耳にしてIHFは正直のところ困惑した。

たしかに、日本人のゲリラ観と我々とには差があるだろうし、昨年12月、ユーゴでIHFが日本協会関係者と話合った時は、中東政情がかなり不安でもあった。しかし、今はまったく戦争状態ではないし、ゲリラ問題も今回あるいは日本だけが特に危険にさらされているわけではない。

もちろん、IHFも〝安全〟には万全を期しており、エミール・ホルレ氏（IHF審判・規則委員長）がスイスナショナルとともにテルアビブへ遠征、調査している。

IHFは、テルアビブにおけるアジア予選は、まったく安全かつ公平に行われることを確信しており、日本が、一時的にせよ棄権を考えたことは残念である。

IHFを代表してマックス・リンケンバーガー氏（事務総長）が日本に対して「ペナルティを科すこともあろう」と通告したのは、日本の棄権がIHFの考えている方向とは逆の方向に進むからだ。

IHFは、ハンドボールが伝統のスポーツとして盛んに行われている国や、組織がしっかりし、意欲的にハンドボールを普及、研究している国と組んでこのスポーツを世界的なスポーツにしようと努力している。そのためには、日本はIHFに欠くべからざる存在であり、その日本が、自己の立ち場だけを考えてアジア予選を棄権することは、IHFにとって不利益だ、とリンケンバーガー氏はみたのであろう。

イスラエルのアジア地域所属について

——イスラエルは現在でもヨーロッパカップ（注・ヨーロッパ各国チャンピオンチームによる大会）には代表を送っているし、アジア地域に属するIHF加盟国が東西両極端に分かれている事情もIHFは識っている。

しかし、イスラエルはAGF（アジア競技連盟）の加盟国でありIHFが、再び同国をヨーロッパ地域に戻す（編集部注・イスラエルは一九七〇年までヨーロッパ地域）かどうかは今のところなんとも云えない。

アジアを東、西に分けるのも一方法だが、そうすると西サイドはイスラエルが孤立してしまい、結局、アジア代表を決める必要が生じた場合、イスラエル対東サイドとするほかはない。

オリンピックハンドボールについて

——ミュンヘンオリンピックでの実施は、ハンドボールの声価を大いに高め、モントリオール（一九七六＝昭51）でさらに大きな飛躍を遂げるだろう。

モントリオールは男子12ケ国、女子6ケ国で行なうが、男子は今年の第8回世界選手権優勝国と開催国（カナダ）のほか10ケ国は来年10月以降、大陸別の予選で選出することになろう。

女子はカナダと、次回の世界選手権上位5ケ国に決まった。男子のように大陸別の予選を行わないのは、優秀な国同士の試合によって女子のハンドボールというものをこの機会をとらえて全世界に〝宣伝〟したいからである。

一九八〇年のオリンピックは、モスクワが最有力とみられ、そうなればハンドボールの実施は間違いない。もし、ロスアンゼルスなどに開催地が決まった場合、ハンドボールは微妙だ。どのような都市でオリンピックが行われてもハンドボールがはずされないために一日も早く〝世界のスポーツ〟にすることが必要だ。

今後の世界選手権について

——オリンピックへの定着、オリンピックでの男女実施によって世界選手権の開催サイクルも変えねばならない。具体案は今秋のIHF総会で決まると思うが、男女ともオリンピックの中間年毎、つまり4年に1回（編集部注、現行は男子が2年に1回、女子が3年に1回）となろう。1年間に男女両方の世界選手権では経済的な負担が大きくなり、これが一つの問題だ。

世界学生選手権について

日本はユニバシアードへの参加（包含）を希望していると聞くが、ユニバシアードは現在でも規模が大きすぎて悩んでいるようだし、新種目の加入は難しい。

ハンドボールは2～3年に1回単独開催しているが、IHF事業でないことでもあり、特にユニバシアードへの参加を働きかけてはいない。

アジア地域のハンドボールについて

（この問題は必しも私の領域ではないが、と前置きして）最近インドが、大学を中心に急速な発展を示している。

中国については、加盟申請があれば喜んで迎えるが、台湾を追放するのが条件ならば問題である。

アジア選手権やアジアカップなどを日本が中心となり是非開いて欲しいが、その場合、IHFが経済援助することは現時点では難しい。（文責・編集部。この会見にあたりハインツ・ブラッシュ氏〔大崎電気嘱託〕に通訳願いました）

日本協会、新局面へむかう

全国評議員会 全国理事会

日本協会は2月10日午前10時10分から全国理事会（定数33名以内、現在数30名、出席24名＝成立、ほかに監事1）を、同午後2時40分から定期全国評議員会（定数52名、出席5名、委任状28通＝成立、ほかに田村会長、徳永、西両副会長）を東京渋谷の岸記念体育会館で開いた。

両会議で、田村会長は特に発言を求め「日本協会は年ごとに巨大化、国際化している。これまでどおりの運営感覚で進めていくことが将来の日本協会にとってプラスになるかどうか。今後各方面で充分に検討して欲しい。」と述べ、さらに「日本協会の最大課題である〝財源〟については、現状において限界に達したが、アマチュア競技団体としてのモラルは守りつづけたい」と言葉をつなぎ、各評議員、各理事の支持をうけた。

この日は、技術部が頂点強化対策に、抜本的な機構改正を示し承認された以外、目立った動きはなかったが、日本協会そのものが、オリンッピク定着を機に、一つの脱皮を迫られていることが各問題で浮き彫りにされ、日本ハンドボール界は、間近かに新しい局面の展開を果たさねばならぬ印象を強めた。

頂点強化は「3部（技術・普及・審判）合同委」で

男女頂点強化問題

この日の両会議で、最大の焦点となったのは、男女頂点強化と、目白押しに並んだ国際交流への対しょである。

頂点強化については、女子がすでに来年世界選手権の開催がせまっており、しかも、この大会での上位5ケ国にモントリオールオリンピックへの出場権が与えられることや、男子も来年内にモントリオールオリンピックアジア予選の実施は必至とあって、各理事から、新・全日本の確立など早急な具体策の立案が望まれた。

これに対して、施策として技術部――渡辺(慶)技術部長から、ナショナルチームの新構想が別表のように発表され、承認をうけた。

新構想の特色は、ナショナルチームのプロジェクト化を強く打ち出していることと、審判・普及指導・技術による「3部合同委員会」を新設しようとしていることだ。

ナショナルチームのプロジェクト化は、これまでも一部から強く望まれていたものだが、踏み切れず、ようやく実現の見通しがたった。これによって、男女の頂点強化は、スムースに推進できるものと期待される。

「3部合同委員会」は、頂点強化には競技各部との連けいが不可欠、多角的にトップを強化していこうという姿勢と、ナショナルチームの「私有化」をチェックする意味を含めての組織で、諸外国の設けている「強化委員会」に似たものだ。

これによって、荒川理事長が昨年来、発表をしていた「強化委員会」構想は白紙に戻されたが、荒川案が「3部合同委員会」という形で陽の目を見ることになったともいえよう。

「3部合同委員会」のメンバーは、3部の各部長と、各部委員若干名による10名前後とみられ、場合によっては、日本協会推せん委員が2～3名追加されそう。

渡辺部長は、ただちに具体的な作業へ着手するといっており、早ければ3月下旬に、初委員会開催にこぎつけられるだろう。

「ヤング全日本」を新編成

ナショナルチームは、本誌既報のとおり、男子については世界選手権アジア予選を前にリストアップされ、ジュニアの新しい名簿

（別表）の承認をうけた。

なお、今年度からジュニアは「ヤング全日本」と改称、3月内に合宿（詳細未定）を行う計画で今回の指導陣には川上整司、近森克彦、東一敏の若手3氏を登用する。16才の和泉（岩国工1年）のリストアップは注目される。女子の「ヤング全日本」は今後の研究課題として残し、48～49年度は手をつけない。

目白押しの国際事業

今後の国際交流については、執行部から向こう5年間の予定行事が並べられた。発表された内容によれば、

▼昭和50年度▽第6回世界女子選手権（モスクワ。上位5ケ国がモントリオールへ）、▽モントリオール男子アジア予選、▽第2回東ドイツ交流（日本側遠征）

▼昭和51年度▽モントリオールオリンピック(7月)、▽第3回東ドイツ交流（東ドイツ来日）

▼昭和52年度▽第9回世界男子選手権アジア予選、▽第7回世界女子選手権アジア予選、▽第4回東ドイツ交流（日本側遠征）

▼昭和53年度▽第7回世界女子選手権、▽第9回世界男子選手権

▼昭和54年度▽オリンピック予選と、毎シーズンすき間のないラインアップである。

これら一つ一つに代表チームを送りこむには、綿密な強化計画がない以上、成就が難しく、さらに、いずれも一千～二千万円の経費が必要で、強化・予算両面から日本協会は「これまでにない緊迫した局面に立たされている」（荒川理事長）。大きな成長への〝陣痛〟ではなかろうか。

問題かかえる「アジア予選」

オリンピック、世界選手権は、男女ともにアジア予選がさけられず、今回の男子遠征のように国際事情、安全などの問題がつきまとうため、各理事の発言もしめり勝ちで、さしあたり、来年度に予定されるモントリオールオリンピックアジア予選については、荒川理事長に一切を委任することとなった。消息通は、同予選には日本、韓国、イスラエルのほか台湾、クウェート、レバノンや仮加盟のインドも正式な資格（加盟）をとれば、当然エントリーするとみており、ミュンヘン時の予選（46年11月、東京ほか）より、参加国は増加が確定的といえる。

4ケ国以上を集めての大会となれば、当然、運営力の増強も必要で、オリンピックへの定着は、日本協会そのものの〝体質改善〟にまでつながる大きな問題を提起したといえよう。

予算問題

49年度予算については、神田財務担当が、今年度は海外遠征の予定がないため、一般会計は二千万円内におさえ得るが、来年度以降の相次ぐ大事業のために〝資産の確保〟につとめたいと説明。

―昭和48年度男子ナショナルチーム―

［ナショナルA（第8回世界選手権代表）］

	氏名	所属	身長	年齢
GK	本田　洋	大阪イーグルス	180cm	26才
	柳川　清	大同製鋼	175	22
FP	藤中　憲二	大同製鋼	179	26
	中井　武二	大同製鋼	181	24
	花輪　博	大同製鋼	178	23
	柳川　実	大同製鋼	175	20
	木野　実	湧永薬品	180	28
	大江　隆夫	三菱レイヨン大竹	172	24
	佐藤　要二	本田技研鈴鹿	180	24
	夏目　真治	中京大	180	22
	菊池　悟	早稲田大	186	21
	村田　幸男	法大	175	20
	蒲生　晴明	中大	192	19

［ナショナルB］

	氏名	所属	身長	年齢
GK	柴田　正章	法大	187	20
	斉藤将一郎	日体大	186	20
FP	菅野　肇	日体大	180	20
	斉藤　幸司	日体大	175	20
	津川　昭	大阪経大	180	22
	穂積　豊彦	大阪経大	180	21
	田上　敬三	本田技研鈴鹿	178	22
	松原　光三	大同製鋼	180	23
	柳　隆司	法大	177	22
	大熊　昌己	中大	178	20
	脇若　正二	早大	180	21
	中村　博之	大阪体大	180	22

ヤング全日本（男子）

	氏名	所属	身長	年齢
GK	○小松伊佐夫	大崎電気	180	19
	市川　孝	本田技研鈴鹿	175	20
	三田　祥生	日新製鋼呉	180	21
	酒谷　信彦	金沢工大	181	19
FP	○上村　茂	中大	178	21
	○藤本　康生	中大	176	20
	○関　健三	中大	182	19
	丸井　圭仁	大阪体大	165	19
	松岡　良潤	大阪体大	187	19
	○藤井　康之	湧永薬品	177	21
	田中佑次郎	湧永薬品	170	21
	由利　淳二	湯沢高	180	17
	麻生　武志	湯沢高	185	18
	岡本　貞志	早大	186	20
	○福井十志男	京都産大	183	21
	柳原　雄二	芝浦工大	186	20
	岸見　圭彦	中京大	184	20
	吉田　義憲	日新製鋼呉	176	21
	布施　雅夫	セントラル自動車	178	20
	平野　稔	海上下総	180	20
	○梅林　広	蒲原ク	179	20
	○佐藤　恭政	中大附高	179	18
	生駒　靖夫	生駒高	182	18
	鈴木　康正	名城大附高	176	18
	和泉賀都彦	岩国工高	188	16

○印は昨年度からヤング入りしている選手

49年度登録 一般Bの廃止決める

物価高とうによる事務局経費のはね上りは、加盟金、登録金の一部手なおしを余儀なくされ、また機関誌購読料も印刷経費、発送経費の値上りから2年ぶりの改訂を申し合せた。

登録料のうち、48年度初めて試みた一般のA、B、C3ランク制は、Bについて事務上及び大会運行面での繁雑さなどからAとの一本化を望む声が強く、「AB」「C」の二本建てに改正が決まった。

この結果AとBは「A」と改称、同額の登録料となり、あらゆる大会への出場資格をもつこととなり「C」は登録料をすえおき、出場資格も昨年どおり、都道府県大会及びブロック大会（全国大会予選を兼ねぬもの）までとされた。

このほか、「学生」の登録料はチーム、個人の二重徴収を廃め、チーム登録料を千円アップすることによって一本にしぼった。これで、高校、学生は個人登録料の必要がなくなる。

また、加盟金は、懸案のチーム登録数によるランク制（いわゆる国際連盟法式）の採用を決め、加盟団体からの徴収も提案されたが、50年度以降の研究課題とすることで、49年度の実施は見送りとなった。

都道府県協会加盟金

【A】	100チーム以上	5万円
【B】	40チーム以上	3万円
【C】	39チーム以下	2万円

上表の新加盟金による財務部の推定はA3協会、B11協会、C33協会である。

オリンピック基金、ルールブック、テキストブック（第1版）などについては現行額がすえおかれ、審判員の登録料新規定は別掲のとおり議決された。オリンピック基金は「一般C」には義務づけず任意とすることになった。

重要財源の一つ用具検定料も業者側に現行50円（一個あたり）から80円の値上げを要請する。

これらの決定により49年度の一般会計収入予算額は二三、三四〇〇〇〇円となり、事業予算(支出)額一八、四〇三、四〇〇円を上廻り、財務部の構想を満足させるものとなるが、収入のうち日本体協からの補助金や機関誌広告協賛料などで三、二八〇、〇〇〇円の不安定材料があり楽観は許されない実情である。

（49年度事業予算については次号詳報）

昭和49年度登録金（単位・円）

種別	高校	学生	一般 A	一般 C
チーム登録金	一、五〇〇	四、〇〇〇	四、〇〇〇（旧Bも含む）	三〇〇
個人登録料	なし	なし	一人二〇〇	なし
機関誌購読料（年間）	二、三〇〇（別途請求）	二、三〇〇	二、三〇〇	義務づけず
モントリオール・オリンピック基金	三〇〇（別途請求）	五〇〇	五〇〇	義務づけず
計	一、五〇〇（別途に二、六〇〇）	六、八〇〇	六、八〇〇＋二〇〇円×人数	三〇〇

奈良市で全国中学生大会

高専大会も実施を検討

49年度事業日程については、別表のとおり承認された。

東ドイツ（男子ナショナル）の来日については、日程がいぜん未確定だが5試合のうち、第1戦（8月31日東京体育館）を「第21回NHK杯」とすることにした。

国内選手権では全日本実業団選手権の男子をサーキット化するのが注目される。全日本学生は12年ぶりに仙台市で開かれ、全日本自衛隊が、全日本実業団リーグと同会場で行う試みが採られる。

3年目を迎える全国中学生大会は、これまでの愛知県から初めてはなれ奈良市（奈良市立体育館、添上高など）で行われる。

また、懸案の高専による全国大会について渡辺(五)理事(北信越)から提案があり、すでに30校近い高専ハンドボール部のはげみとして、前向きに検討するよう申し合せた。現在まで高専の大部分は一般へ登録し、県大会や、地方高専大会などに出場していた。

全日本総合は、今年も東京体育館での開催が決まり、出場チーム(枠)については後掲のように承認された。一部で要望されている「日本リーグ」化については話し合われなかった。評議員会では小袋評議員（高体連）からこの大会が〝地方不在〟なことに善処が望まれ、荒川理事長は来年度以降の改正をほのめかした。

国際交流は、恒例の新シーズンオープニングシリーズにスタディオン・IF（デンマーク男子）の来日が決まり（13頁詳報）、日韓交流は、高校男女が初めて釜山市（これまではソウル市）で行われるほか、各部門が今年も活発に往来する。

昨秋11月の全国理事会で議決した50年以降の国体については、新たに「教員の部に参加する資格を有する者は他の種別へは参加できない。教職にあって教員の部に参加できない者は成年への参加を認

める」ことが確認された。新規事業では、評議員会で小委評議員から、OG（クラブ）に対する施策が強く望まれ、田村会長は将来構想として研究することを約した。

【第26回全日本総合選手権出場枠】

▼男子（16チーム）▽前年度優秀2（大同製鋼、湧永薬品）、全日本実連4、全日本学連3、全日本教職員連、全国社会人各2、全日本自衛隊連、全国高体連、開催地代表各1

▼女子（12チーム）前年度優秀2（日本ビクター、田村紡）、全日本実連4、全日本学連2、全国高体連、全国社会人、次年度国体開催地代表、開催地代表各1

「国際審判員要項」など決める

審判部

日本協会審判部は1月26、27の両日静岡で合同会議を開き、国際審判員に全日本総合選手権のレフェリングを義務づけるなどをもりこんだ「要項」の制定と、「公認審判員規定」の一部変更を決め、2月11日の全国会議で承認をうけた。

国際審判員に関する要項

―日本ハンドボール協会―

日本ハンドボール協会における国際審判員の取り扱いについては国際ハンドボール連盟（以下IHFと称す）の国際審判員規定によるものの他、次の要項による。

I　国際審判員の推せん基準

(1)日本ハンドボール協会のA級登録審判員であること。但し、A級審判員として5年以上の経験を有することを原則とする。

(2)人格、試見とも国際審判員としてふさわしいこと

II　IHFへの申請

該当者には毎年8月末日までに通知し、申請に必要な書類を作成して9月初旬にIHFへ申請する。

III　IHFへの申請者の決定

上記Iの基準にもとずき、審査委員会において人選する。

IV　国際審判員の義務

国際審判員は国際競技のみならず国内の競技の審判も担当し、常に指導的な立ち場になければならない。また、全日本総合選手権大会に審判員として参加する義務がある。

V　登録料

国際審判員として認定された者は、登録料（申請に要する費用を含む）五千円を定められた日までに日本ハンドボール協会へ納入しなければならない。

附記　本要項は昭和49年4月1日より施行する。

公認審判員規定の一部変更

14（審判員の登録）

A級、B級、C級の各級公認審判員は下記によって登録を行なわなければならない。

一、登録の期間　毎奇数年度の5月1日から5月31日までの期間

二、登録料　A級及びB級500円　C級300円

三、登録の手続

き各都道府県ごとに一括し、登録者の名簿（所定の様式）2部を作成し登録料をそえて日本ハンドボール協会審判部に提出する。日本ハンドボール協会審判部は、必要な手続きの後、名簿1部と登録済証を返送する。登録済証は手帖に貼付する。

四、資格の消滅

登録を行わない場合には、公認審判員の資格を失なう

（注）「日本協会規程集」をお持ちのかたは19頁上から5行目「14（資格の更新）」全文を削除し、20頁の余白に「14」として右の改正分を書き添えられると便利です。

日本から7氏が公認

IHF審判員名簿

IHF（国際ハンドボール連盟）1月18日「一九七四年度国際公認審判員名簿」を発表した。

それによると総数は34ケ国200名で、日本からは後掲の7氏が公認された。注目されるのは台湾から初めて4氏がリストアップされたこと。韓国は今回1人も公認を受けていない。

【日本協会国際審判員】安藤純光、佐野和夫、岡前義春、稲石三二、岡本克彰、山田　計、中西敬一

普及部長に宮本氏新任へ

日本協会は2月10日の全国理事会で、渡辺（慶）常務理事が兼務（代行）していた普及部長、技術部長のうち、普及部長（常務理事）に宮本西嗣氏（50才、日体大出、千葉大学教授、日本協会普及部委員）を会長推せん理事として新任するよう要請することになった。

これで理事数は31名となる。

昭和49年度日本協会主要事業

- スタディオン・IF（デンマーク男子）招待　3月31日～4月10日　各地（5試合）
- 第5回日韓女子社会人交流　5月，韓国（＝予定）
- 第15回全日本実業団男子選手権リーグ　5月25日～6月16日　各地
- 第6回全日本自衛隊選手権　6月14～16日（東京体育館）
- 第8回（女子第3回）日韓学生交流　6月　国内各地
- 第15回全日本実業団女子選手権　7月3～7日（盛岡市）
- 第25回全日本高校選手権　8月2～7日（北九州市八幡）
- 第9回日韓高校交流　8月　韓国・釜山市
- 第17回全日本教職員選手権　8月10～13日（四日市市）
- 第3回全国中学生大会　8月17日～19日（奈良市立体育館）
- 第1回日本－東ドイツ（男子）交流　8月31日～9月11日　各地（5試合）＝内定
- 第24回（女子第6回）全日本学生選抜東西対抗　9月15日（名古屋市）
- 第15回国際ハンドボール連盟総会　9月（イタリア・ベニス）
- 第29回国民体育大会ハンドボール競技　10月21～25日（水海道市）
- 第17回（女子第9回）全日本学生選手権　11月19～24日（仙台市）
- 第4回日韓社会人交流　11月　国内各地
- 第26回全日本総合選手権　12月11～15日（東京体育館）
- 昭和49年度全国男子実業団トーナメント　50年2月（広島県＝予定）

韓国（ジュニア選抜）迎える有力チーム
名古屋で選抜女子大会（3月13〜17日）

全日本実連は、第3回日韓女子社会人交流で3月10日に来日する韓国ジュニア選抜（洪淳泰団長以下役員4、選手13）を、第2回NBN杯全国選抜女子大会に参加させることを決め発表した。

全日本実連は、48年度日韓交流事業のうち、ただひとつ残っていた社会人女子の受け入れについて検討を進めていたが、3月13日から17日まで名古屋市体育館で開く第2回NBN（名古屋テレビ）杯全国選抜女子大会のゲストチームとして組み入れることに決め、2月10日の全国理事会で承認をうけた。

来日する韓国ジュニアは、昨年6月全日本学生が訪韓した際に対戦したメンバーを主力としており、いずれも韓国高校界のトッププレイヤーとして名を知られた選手ばかりだ。

特に、李京淑は昨夏の日韓高校（駒沢）に慶熙女高のエースとして来日、シャープなプレーを見せた。このほか金玉子（聖貞女高）GK金賢淑（同）らが活躍するものと思われる。

消息通は、このメンバーの大半が、今夏6月の日韓学生で再来日するのではないかという。

強豪・白花醸造（ソウル）のチーム解散で、韓国女子のトップは、ジュニアを名乗っているものの、今回訪日する選手以外にあまり手駒はないとみられるからだ。

このシリーズの成績いかんで、来年の第6回世界女子へのエントリーも決められる、という推測もある。

○……日　程……○

▽第1日（3月13日16時）
東京重機（東京）×日立栃木（栃木）
韓国ジュニア×日本ビクター（茨城）
ブラザー工業（愛知）×田村紡績（三重）

▽第2日（14日16時）
田村紡績×日立栃木
韓国ジュニア×東京重機
ブラザー工業×日本ビクター

▽第3日（15日16時）
日本ビクター×田村紡績
韓国ジュニア×日立栃木
ブラザー工業×東京重機

▽第4日（16日14時）
日本ビクター×日立栃木
東京重機×田村紡績
韓国ジュニア×ブラザー工業

▽第5日（17日13時）
ブラザー工業×日立栃木
韓国ジュニア×田村紡績
東京重機×日本ビクター

注目の日立、日本ビクター

ところで、NBN杯は、名古屋の商業放送が、女子ハンドボールに注目、一昨年から「招待試合」として開始したもので、昨年からは多数チームを迎えて「大会」に成長させたものである。

これまで「全国」「全日本」の名を冠せられた全国大会は、すべて日本協会の主催となっていたものだが、この大会の主催は、全日本実連とNBNがつとめるというこれまでのカラを破ったシステムとして注目される。

大会は別掲のような日程（リーグ戦）で争われるが、日本側各チームは、来シーズンの新戦力を加えて登場するといわれ、世界選手権ーモントリオールを間近かにした日本女子界にとって見逃せぬ内容となりそうである。

特に、昨冬の全日本総合で旋風を巻きおこした日立栃木の試合ぶりは一つの焦点で、他の4チームも「日立だけには……」と闘志を燃やしていると伝えられ、もつれた展開が予想できる。

また、チャンピオン・日本ビクター（茨城）が、主力を全日本から戻した各チームの挑戦をどう迎えうつかも、一つのみどころといえよう。

日韓の戦力占い、女子有力チームの〃新しい〃せりあい、興味深いイベントである。

なお、韓国ジュニアは、この大会以外転戦は行わず19日離日の予定。

【韓国女子ジュニア】

監督	李　峰一	（30才）
コーチ	金　正季	（30才）
GK	金　賢淑	（19才163cm）
	張　恵玉	（19　161　）
FP	姜　京宜	（18　162　）
	李　京淑	（19　159　）
	金　福順	（18　164　）
	金　玉子	（19　162　）
	李　相玉	（18　167　）
	金　竹慶	（18　159　）
	曹　賢萃	（18　159　）
	崔　錦姐	（19　156　）
	金　淑子	（18　160　）
	金　貞昊	（18　165　）

スタディオン（デンマーク）も来日
静岡教員団などと5戦

日本協会は、恒例の新シーズン開幕国際シリーズとして受け入れを決めていた去年のデンマーク男子チャンピオンチーム「スタディオン・IF・コペンハーゲン」の来日日程などを2月10日の全国理事会で次のように発表した。

来日メンバーはV・ヘンリクセン団長、F・アンデルセン監督ほか14選手で昨年チャンピオンとなった時のメンバーがそっくり揃っている。ナショナルプレイヤーは5人（別表○印及△印）。

このうちミュンヘン・オリンピック（デンマークは13位）に出場したのは3選手（別表○印）で、J・フランドセン（29才・184cm・83K）は今回の世界選手権代表で来を期待されている。

この3人を軸にGKペーターセ

もある。

このほか、B・ヨルゲンセン（29才、180cm、83K）はヨーロッパ屈指のプレイヤー。すでに公式国際試合101（別表カッコ内の数字）を数えるベテランだ。S・ルント（24才）は193cm、94Kの巨漢で、将

日　程

3月30日（土）		来日（羽田）
31日（日）	15時	静岡県教員団（清水市体育館）
4月3日（水）	18時	二和家具（岐阜県民体育館）
6日（土）	15時	愛知教員（愛知県体育館）
7日（日）	14時	全日本（京都府立体育館）
8日（月）	18時	全大阪（大阪市中央体育館）

【スタデイオン・IF】

GK	△L・ペーターセン	（12）
	F・オルセン	
FP	P・プロギャルト	
	○J・フランドセン	（86）
	L・ニールセン	
	△T・ヨルゲンセン	（3）
	○B・ヨルゲンセン	（101）
	○S・ルント	（10）
	R・クリステンセン	
	C・アンデルセン	
	B・グレイベ	
	B・ラスミューゼン	
	F・O・ジェンセン	
	O・ニールセン	

ン、T・ヨルゲンセンなどが主力とみられる。

同クラブは、二千と伝えられるデンマーク男子界の頂点に立つ全国リーグ一部(10クラブ)に属し、一九六六(昭42)年昇格以来3位、4位、6位、6位、4位、3位とトップクラスに名をつらね、昨シーズン宿願の初優勝を遂げた。

北欧特有の華れいなプレーを身上とし、国内でも多くのファンを得ているが、今季は出足不調で現在は3位である。

対する日本側は全日本教職員ベストエイトの静岡教員団がトップを切り、昨年あたりからめっきり力をつけてきた新進実業団・二和家具(岐阜)、伝統を誇る名門クラブ・愛知教員など国内中堅の単独チームが並ぶ。

実力的には湧永薬品、大阪イーグルスが主力に予想される全大阪の試合ぶりに注目が集る。

全日本は、いわばこの試合が〝世界選手権帰国歓迎試合〟だが、ここで負けるようであってはまずい。全大阪、全日本の陣容は3月に入って発表される。

なお、デンマークからの来日は史上初。(注)別掲の日程のうち時間は予定。

名古屋で「ビッグ4リーグ」

全日本実連は、このほど、これまで大同製鋼(愛知)、湧永薬品(大阪)、大崎電気(埼玉)、三景(東京)の4強によってつづけていた定期戦〝ビッグフォアリーグ〟を同連盟事業として受けつぎ朝日新聞社のバックアップを得て一段と発展した規模の大会とすることに決め、その第1回を3月21、22日の両日名古屋・愛知県体育館で開くことに内定した。

この大会は、4年前、大崎電気三景、湧永薬品、芝浦工大が「4強対抗」として対戦したのを母体に、47年からは芝浦工大に代って大同製鋼が加わり「実業団ビッグフォア」となった。今年の大会はこれまでどおりの4チームで行うが、近い将来には全日本実業団の上位4強あるいは、学生、教職員のトップチームを加えることも検討したいと当番チーム・大同製鋼の中浜大軸氏(監督)はいっている。

【第1回朝日招待全日本実業団ビッグフォアリーグ】▽3月21日13時、湧永薬品×大同製鋼、大崎電気×三景▽3月22日10時、三景×大同、湧永×大崎、三景×湧永、大崎×大同。

5月25日に開幕
日本実業団リーグ

全日本実連は、昭和49年度から全日本実業団選手権を上位チームのリーグ戦で各地転戦によって行うよう検討していたが、新年度は5月25日から6チーム、6日間の日程で実施することになった。

第1航空群が連勝
海上自衛隊全国大会

第2回全国海上自衛隊大会は2月14日から16日までの3日間長崎・佐世保市立体育館に22チームが参加して行われ第1航空群（鹿児島）が、全日本自衛隊1位の第3術科校（千葉）に快勝、2年連続大優勝旗を獲得した。

▽1回戦　第1航空群(鹿児島)25—10第2掃海群(神奈川)、第2航空群(青森)15—10第1掃海群（広島)、大湊地方隊18—13第3護衛隊群(京都)、第2護衛隊群24—7第1潜水隊群(広島)、佐世保地方隊(長崎)25—3第2潜水隊群(広島)31航空群(山口)18—5第4護衛隊群

▽2回戦　横須賀地方隊(神奈川)17—12小月教空群(山口)、第1航空群16—8呉地方隊(広島)、舞鶴地方隊(京都)12—7第2航空群、大湊地方隊12—9江田島(広島)、第2護衛隊群16—7第21航空群(千葉)、第1護衛隊群(神奈川)25—8佐世保地方隊、徳島教空群(徳島)14—8第31航空群(山口)、第3術科校(千葉)14—9第4航空群(千葉)

▽準々決勝

第1航空群　26（13—6、13—2）8　横須賀地方隊

大湊地方隊　11（5—0、6—5）5　舞鶴地方隊

第2護衛隊群　13（6—3、7—4）7　第1護衛隊群

第3術科校　12（6—5、6—6）11　徳島教育空群

▽準決勝

第1航空群　22（9—3、13—3）6　大湊地方隊

第3術科校　15（7—3、8—5）8　第2護衛隊群

▽3位決定戦

第2護衛隊群　19（11—4、8—11）15　大湊地方隊

▽決勝

第1航空群　23（10—5、13—5）10　第3術科校

後記　田村幸雄

1・2回戦では佐世保地方隊が第1護衛隊群に敗れる番狂せがあり、このほか小月教空群も前半のリードを守り切れず、横須賀地方隊に逆転負けした。千葉県内にあってライバル意識を燃やす第3術科校（全日本自衛隊1位）×第4航空群は上位進出をかけて白熱したが第3が押し切った。

ベストエイト(準々決勝)では第3術科校×徳島教育航空群がもつれた。第3は立ちあがり三浦宮本らで4—0とした、徳島も36才のベテラン田上の好リードで追いあげ22分5—5とした。後半も一進一退から予断を許さなかったが、第3は11—11から終了間ぎわ西田が貴重な決勝点をたたきこんだ。

その他の3試合は順当の結果で第1航空群はエース中水流の活躍などで横須賀に快勝、大湊も前半の優位を活かし、第2護衛隊群は地元の声援に応えて勝ち進んだ。

準決勝は第1×大湊が意外の大差で終ったのに対し、第3術×第2護は気力にあふれた好試合。

速攻、ポストと多彩な攻撃を見せる第3が前半巧く主導権を握ったが、第2も後半の立ちあがりよく得点、勢いにのって逆転するかと思えたが、第3は守りを固めてリードを守り、押し切った。

決勝戦は海上ハンドボール界を代表する強豪同士。

序盤はたがいにチャンスを活かして互角だったが15分をすぎてから第1が中水流、立野の連続4ゴールで一気に第3を引き放した。

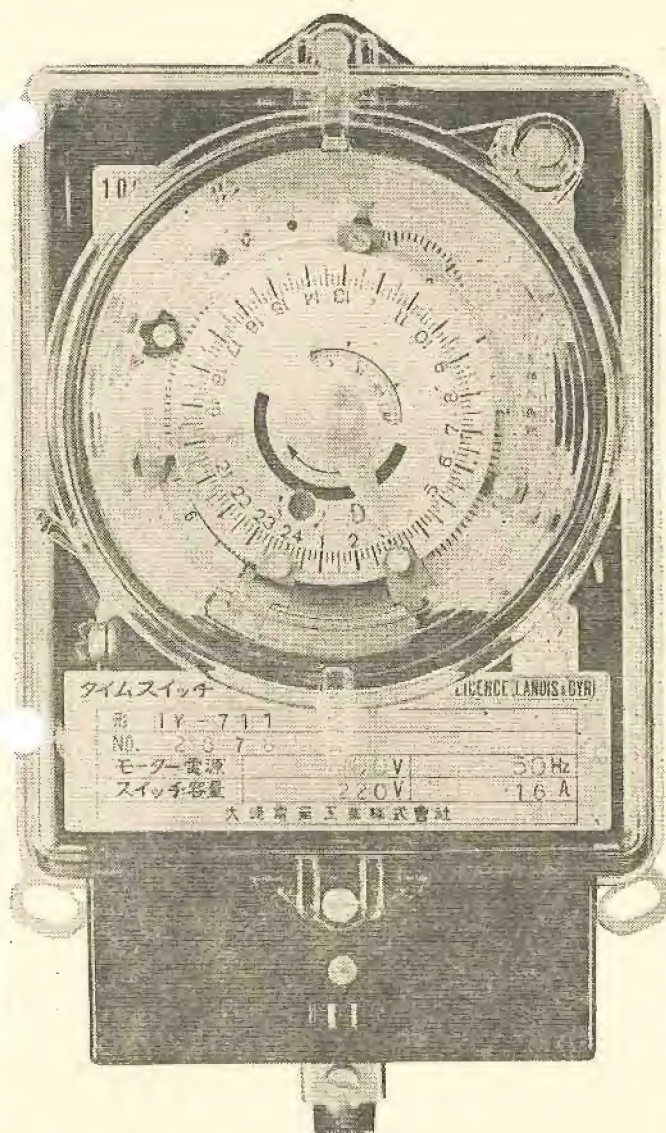
後半も第1がいきなり3ゴールして13—5とし、館内を埋めた多数の観客の声援をうけた第3は必死に追いあげたが、大量リードで余裕をもつ第1はディフェンスの動きもよく10分すぎからは一方的な経過になってしまった。

優勝はじめ上位は落ちつくべきところにおさまったが、昨年よりも全般のレベルは向上、伯仲したせりあいも見られるようになり、来賓席に並ぶ各隊司令も一喜一憂するにぎやかな大会であった。

Osaki

タイムスイッチ

TYシリーズ

24時間では足りないあなたに1日＝72時間

大崎タイムスイッチならそれが可能です。毎日、毎週、毎月、定時刻に自動的にスイッチを〈入・切〉するあらゆる設備機器や年間の日没・日出時刻に応じ、自動的に照明を〈入・切〉する場合に最適です。

大崎電氣工業株式會社

〒141 品川区東五反田2丁目2番7号 TEL.03 (443) 7171番

大洋デパート

廃部を正式決定

立石電機（熊本）に移籍

□……「大洋デパート」が昨秋の同社大火事による自粛で、ついに姿を消すことになった。

フェア、スピーディ、スマートな試合ぶりでハンドボール界ではめずらしく全国的にファンを得てきた同チームが、このようなかたちで球界を去るとは誰が予想しただろう。その強さにおいては、改めて説明する必要もなかろう。

□……藤田日本協会理事（九州）の話によれば「廃部」は今年早々に同社役員会で決められたそうだ。

この報せを受けた熊本協会は、約一ケ月にわたり、なんとか「大洋の姿」を熊本にのこそうとつとめ、県スポーツ界、県財界などとの話しあいをつづけてきた。

□……1月末になって「大洋」をそっくりそのまま引きとりたいという企業が見つかった。県内山鹿市に工場をもつ立石電機（本社・京都市）。同社・立石一真社長が熊本出身であることも幸して、話は一気にまとまり、2月7日現部員13人と今春大洋入社予定の2人あわせて15人の〝移籍〟が熊本県庁内の知事室で関係者立会いのもとに公けにされた。

□……去就を注目されていた監督の井薫氏（中大出、48年度全日本女子監督）も7日の発表席上で、大洋→立石への転籍が決まり、引きつづき陣頭指揮をとることに決まった。昭和36年以来12年にわたる「大洋デパート」の強く華やかな球史はそのページを閉じたがその名は日本ハンドボール界にいつまでも輝きを失うことなく光りつづけるであろう。

大洋デパート全国大会優勝記録

▽全日本総合	5回
▽全日本実業団	7回（6連覇継続中）
▽国　　体	7回
▽NHK杯	7回
・4冠王記録（2回）	
▽昭和44年度	
▽昭和45年度	

・世界選手権代表選手（13人）
西村八千代(第2回)，久蓮松美和子(3)，高山やよい(3)，新保いく子(3)，枝尾清女(4)，三宅美智子(4)，渡辺須和子(4)，垂水秀代(4及5)，小原名苗（4及5)，米恵美子（4及5)，島田夏枝（4及5)，蔵田照美(5)，山下恵美子(5)

在庫少数!!

日本ハンドボール協会編「ハンドボールテキスト」¥300.

お申しこみは日本ハンドボール協会普及部まで

世界女子選手権リポート

「モントリオール」への提言

全日本女子監督 井 薫

第五回女子世界選手権大会での収獲と反省については鈴木義男氏（コーチ）が報告されているので、三年後に迫ったモントリオールオリンピックを目指す斯界への提言を主として、私のリポートと致します。

（一）四十九年度ナショナルチームの早期結成を。

この事に関しては、過去ナショナルチームに携った諸氏と、共通意見である。大会が近くなってのチーム結成や、とり急いでの強化では「世界」を目指す姿勢としてはまったく不充分で、今回の場合のように少くとも一年前に準備され、数回の合宿を経ての、大会参加であることが望ましく、国際大会の有無に係はらず、これぐらいの強化及びチーム構成の確立を、継続的に行なうことが不可欠である。したがって女子の場合来年には早くも上位5ケ国がモントリオール行の権利を得る第6回世界選手権が開かれるのであるから早急に「49年度ナショナル」を発足させる必要があり、それが最も基本的な強化策であると思う。

（二）攻撃に於ける強化点。

今大会に於ても、速攻、フォメーションと日本の特色を生かした得点の場面は屡々あり、これに破壊的なそして確率の高いロングシューターの育成が行なわれれば、そのロングシュートから必然的に生まれるポスト、プレイも併せて、欧州チームに見られない多面的攻撃が期待できると思う。

今回も、古佐原、高野と云った一m五十台の小柄なプレイヤーが、身体全体を使った鋭い動きで、大活躍をしたが、この人達を生かす、大型プレイヤーが育成され、この二つが巧みに噛み合はさった時は、一ゲームの得点も高められる訳で、欧州勢とも、作戦面、コンディショニングの面での互角あるいはそれ以上と云ったレベルに達するであろう。

（三）防禦に於ける強化点。

これはもう、ポストプレイ対策の一言につきると云っても過言ではない。勿論、身長差からくる高い打点のジャンプシュートや、大きいシュートモーション或いは、ボールを完全に握ったプレイからの、フェイントプレイも脅威ではあるものの、ポストプレイの強引さ、巧みさ、そしてそれらの要因と云える。体格差の相違こそ、技術的進歩を期待する前に、解消しなければならない最も大切な事である。つまり、攻撃の面で叫けばれる大型化は、実は防禦の、それもロングシュート対策と云う場面にではなく、ポストプレイの場面に最も望ましいと思える。勿論、総てのスポーツが大型化にやっきとなっている昨今、おいそれと大型選手の発掘、育成は、難しいものの、全国のハンドボール関係者を網羅しても、そう云う人材の確保に、力を集中していただき、ナショナルチームにも最低一～二名は、デフェンス専門とも思えるこう云ったタイプの選手の登用も成されるべきであろう。更にチーム全員が、絶え間ないフットワークを身につけ、ポストに入るパスの段階での、チェックと攻撃のリズムを狂はす。技術的、感覚的、進歩、訓練は、当然成された上での、大型選手の起用でなければ、折角の価値も、無意味になる事は、明きらかである。

（四）ゴールキーパーに就て

今回の、西独、オランダ戦の勝因のひとつにゴールキーパー（小原、和田）の活躍を特筆したい。

従来よりの観念で、キーパーの強化は、即チーム力のアップ、勝負の行方を決める等と分かってはいるものの、つい、フィルドプレイヤー中心の練習計画に走るケースが多く、監督・コーチ等、現場を預るものとして、特殊な練習や、キーパーにのみ要求される筋力の養成等に目を向ける、必要性を痛感した。

最後に今回の遠征には、藤原侑、池田鉄哉両氏が（編集部注・両氏とも全日本女子コーチ）自費同行され、せっかくの見学、視察にもかかわらず親善試合、世界選手権を通じて全日本チームのスタッフ同ように助力をいただいたため、私と鈴木コーチがゲームの運行に全力を集中できたことを両氏に感謝するとともに皆様へ報告いたします。また、派遣人員については、日本協会の「12名」という線があり競技運行面には支障ないものの、遠征中の疲労回復度や、全日本の系統的強化という面からは、機会を見て増員を打ち出していただきたいと思う。

今後は、我々が肌で感じてきたさまざまの経験や、持ち帰ったデータを新しいチームに役立てて欲しいと思い、求められればいつでも協力の準備のあることを申しそえてペンをおきます。

投書欄　明日への提言

日本で外国同士の試合を

オリンピック競技に本格採用となって以来、ヨーロッパをはじめ外国ハンドボール界の動向に興味をもち出しましたが、残念なのは、迫力満点といわれる本場同士の試合を見る機会がないことです。

1年ほど前、テレビでオリンピックの決勝戦が放送され大変楽しかったのですが、その後はこうした番組もなく残念でなりません。

そこで是非、日本で国際大会を開く努力を日本協会に期待します。大がかりなトーナメントが無理なら、3国対抗、4国対抗でもよいかと思います。

日本ではこれまでアジア予選の時に、イスラエルと韓国が東京で対戦し、観客も少なかったのですが、ヨーロッパのAクラス同士なら関心を呼ぶと考えます。

また、テレビ局にヨーロッパの一流カードのフィルムを放映することも働きかけて欲しいものです。それと、日本で世界選手権というのはまだまだ夢でしょうか。【千葉県柏市・石田克彰・21才・学生】

収穫と反省と……

全日本女子コーチ　鈴木義男

オランダでの前哨戦（国際トーナメント）に優勝し、幸先よしと全員明るい希望と強い自信をもって桧舞台に臨んだが、またしても予選の壁を破ることは出来なかった。

国際トーナメントで14―12で勝ったノルウェーに照準を合わし、決勝リーグへの進出を合言葉に綿密な作戦をたてて試合に臨んだ。ところが我々を驚かすことが眼前に突発した。それはカレン・フラセットの登場である。前回の大会で一メートル八一の長身の彼女に、日本はおしまくられているだけ作戦的に随分気を配ってきた。オランダでの国際トーナメントからずっと顔を見せていないだけに、関係者の間では引退説が強かった。これは作戦だったのか、それとも旗色悪しと見て急遽呼びよせたものかはさだかではないが、さすが世界の第一線級、実にすばらしいプレーで5点をもぎとられ16―9のスコアで涙をのんだ。結局、九～十二位決定リーグで、オランダ、西ドイツに快勝したが、十位に終った。

世界選手権ともなると、どの試合も世界最高のレベルのものであり千変万化、電光石火お互いの秘術をつくして展開されるプレーの流れは、力と力の対決、技と技との激突、心と心の熱戦により美の極致にまでそれらがまとめ上げられているだけに、その一コマを取り上げて反省として表現することは仲々むずかしいことである。特に12月15日、ベオグラードのスポーツホールで、八千人の大観衆の興奮と熱気、割れるばかりの声援の中で行なわれたユーゴとルーマニアの優勝戦を見て、その感を深くした。今大会で優勝したユーゴをはじめ上位を占めた共産国チームを中心に特に気のついたことをあえて取り上げて見たいと思う。

先ず第一に基本に対して実に忠実であることをあげたい。オフェンスの場合特にすばらしいフォーメーションとか派手なプレーは見られず、個人技を基盤にしたフリーオフェンスが主で、一見単調な攻め方の様だが、実に基本に忠実なプレーに終始徹している。パスした直後のポジションのとり方の巧妙なこと、ゴール前をよく走り、柔みのあるパスワークで攻撃が間断なく続き、相手の隙を見るや間一髪見せるカットインプレーの鋭さ、又それは再三七メートルスローを誘発する原因ともなる。どのチームもポストプレーを執拗に使い、ロングシューターとポストとのコンビは常に基本通りに行なわれ、そのうまさは絶妙の一語に尽きると思う。

更にこれら上位チームには、必ず強力なロングシューターがいて常にチームをリードし、得点を重ねて勝利へのキーポイントを握っていることを忘れてはならない。

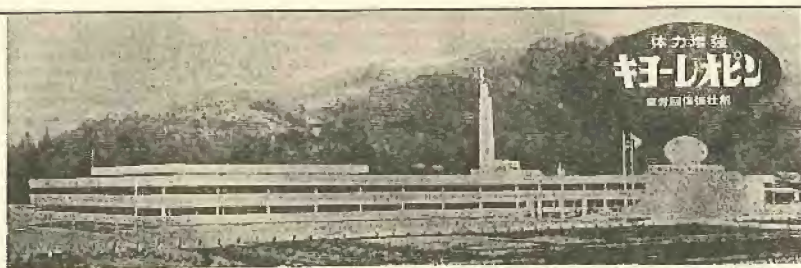
さて我々の敗れた、いや勝てない最大の原因は、日本のお家芸とまで言われている速攻のチャンスをつかみ得なかったことです。

長身からのロングシュートは強烈で、このボールをカットすることは至難であり、又あらゆる角度からの多彩なシュートは、成功の確率が極めて高いため速攻のパターンに結びつけることはできず、その糸口を見つけることさえ出来ない状態であった。

結局、課題として残されるのは、守備力である。守備さえよければ当然速攻に一転して行くこともできるはずである。フットワークの甘さ、体格差から来る不利は如何ともしがたく、いわゆる受身の防禦のみに追い込まれた体力的に、又精神的にスタミナを消耗して守るのがやっとのことであったとにかく防禦は単なるパッシブであってはならないことは言うまでもない。防禦はあくまでも攻撃のチャンスをつかむためのものでなければならない。防禦は一転して攻撃に移る手段でなければならない。ポストのポジションに突入して来る相手を押し出して、ポストへパスを入れさせない様にして相手の攻撃を早い時点につぶしたり、積極的につめて隙があったらボールを取って攻撃に移るなど、

〃守りは即、攻めである〃の原理に一歩でも近づける様な技術を習得することこそ、私達に与えられた重要課題であり、その解決こそが将来への活路でもあると思う。

又現在の速攻、いわゆる第一線速攻もさることながら、中盤のクロスプレーを折り込んだ変化のある波状攻撃体系の確立に主眼をおいて検討すべきではないかと思う。

日本の力も西欧諸国に対しては遜色はない。むしろそれ以上のものであると思うが、前途多難であることを痛感せざるを得ない。然し日本のトップクラスの選手は決して外国選手におとることはないと思う。遠征前、国内の合宿で訓練された速攻、防禦が桧舞台のゲームに通じなかったことに対し責任を痛感すると共に、今後の課題として日本流の多彩な攻めとより素早い動き等、山積された問題の解決に全力をあげて最善を尽さなければならないと思う。

（田村紡監督）

世界女子選手権リポート

力感にあふれたルーマニア

…予選リーグ第1戦…

古佐原　ひろ子

選手権の第一戦は、強敵ルーマニア。同国は前回四位に留まったチームながらかつては世界一の座についたこともある。今回は随分メンバーも変わり、チーム力も落ちたとか伝えられたが、さすが伝統の上位チーム、ゲームに臨んだら、強引なプレーを見せた。「下手は下手なり」と言うことばがあるが、若手は若手らしく一人々々に力強さが感じられた。若いプレイヤーを引っぱっていたのはポストプレーヤーでルーマニアの柱でもある一番年長の選手。リードしながら、自分のプレーをも十分に生かす、特にポストにボールが入ったら、もうシュート体勢、さらにその体勢からの粘りは凄まじい物があった。このプレーは判っていながら日本は同じケースで何点もとられた。この他の選手も強引なカットイン、ロングシュート、男子なみのサイドシュートを射ち分け、そのうえ耐久力がバツグン……。

力感にあふれたチームカラーは色あせていなかった。日本は得意の速攻が出ず、動きが止まってしまい単発シュートが多く一方的に押しまくられた。得点に結びついたのは単独で強引なフェントと視野外からの廻り込みからのもので、結局はダブルスコアで完敗した。大会直前、同じ共産国ユーゴと2試合し、強引でダイナミックなプレーに少し慣れていたためルーマニア戦もダブルスコアで、止められた感じ。もし、いきなりぶつかっていたら、そのアタックにとまどいもっと大差で負けていたかもしれない。その意味で選手権前の対戦は、共産国のほうが大きな収穫をあげられると思う。

云いかえれば西欧、北欧諸国の中で日本は、その実力において最右翼ということができる。

これは、先ごろ来日した西ドイツのラインハウゼンクラブでも判るように、これらの国は、女子のハンドボール界は『勝負よりも健康、美容を優先』しているクラブが主流となっているからだと思う。

日本女子が、世界（ヨーロッパ）の壁を破るには、やはり共産圏対策が第一である。

ユーゴ、ルーマニア、ソビエト、ハンガリー、ポーランド、チェコと今回のベスト6は、すべて共産圏であり、おのずとこの意味ははっきりする。

彼女たちのプレーはスキなく訓錬され、ダイナミックでたくましいのが共通している。

今回も反省として、前回と同じくディフェンスの力と技に課題を残した。日本がヨーロッパの壁を破りオリンピック出場を果たすためには、より以上精力的なディフェンス練習に力を入れる必要があろう。

（FP・東京重機工業）

守備の乱れに泣く　対ノルウェー

…予選リーグ第2戦…

島田　夏枝

前日ルーマニアに破れ念願の決勝リーグ進出をかけ翌九日の対ノルウェー戦に臨む。

前半はお互いにポストプレーや7MTなどで得点し一点差に終り勝負を後半にかける。後半に入り堅い日本のポストプレーへのディフェンスに対し作戦を変えたノルウェーはロングシューターのエース・フラセット選手（カーレンが愛称）にボールを集め積極的に上からのロングシュートを打って来る。これまでの試合ではほとんど無かったロングシュートに対し「ボールへのつめ」「シュートタイミングをつかむ」等の指示があったにもかかわらず、味方ディフェンスの退場なども加わり立ち上がり十分程で五点差がついてしまった。思わぬディフェンスの乱れによりオフェンスまでもリズムをくずしてしまい9－16と予想もしないような大差で破れてしまった。

前回の世界選手権からほとんど国際試合に姿を見せていなかったと言うフラセット選手、もちろんオランダでの三カ国リーグにも出場していなかったし今大会にも出場しないのではないかと聞いていたが、それはノルウェーの作戦なのか、あるいは対日本用の兵器なのか、またしても彼女のロングシュートに負けてしまったようなもの。

選手権大会の五試合のうち、このノルウェー戦以外の四試合は全員が自分の持味を発揮し、ほぼ満足のいく試合が出来たが、全試合の中でも決勝リーグ進出の為の最

世界選手権決勝

ユーゴ対ルーマニア戦を観て

垂水秀代
（全日本女子主将）

第五回世界女子ハンドボール選手権大会の決勝戦は十一月十五日ユーゴスラビアとルーマニアで行なわれました。決勝戦を観戦する為に宿舎から車で約十分、小高い丘にある体育館へ…。すでに体育館の中には数千の熱気を帯びた観戦客で満員、国を挙げての応援と言っても過言ではないほどで国旗を打ちふる人、声をかぎりに声援する人、又人に目を見はらされました。試合はまずユーゴの得点で始まりそれを追うルーマニア、得点的にはユーゴがリードして展開しましたが、ムード的にはルーマニアの追いあげに分(ブ)がある感じで後半はルーマニアが逆転するのではないかと思いましたが結局前半七：七、後半九：四の十六：十一でユーゴの初優勝と決まりました。この試合で感じた事はルーマニアはシュートを打つ者が完全に限られており、その者をマークさえすれば他の者の動きも制約され結局連係プレーとまでいかず単発的な攻めで終るという様なケースが多かった様に思えます。ユーゴの方はそれぞれの選手が自分の個性を強く打ち出しており要所々々では必らずと云って良いほどシュートモーションでルーマニアのバックスを怯やかしていたプレーが目立ちました。隣国ではあるし、大会がある度に試合をして、お互い手の内を知った者同志という事もありやりにくかったのではと思ったが、国の名誉を賭けての凄まじいばかりのファイトを激突させての一戦でした。そして褒められるべきではないと思うが要所々々での〝有意義とも云える故意的な反則〟。勝つ為にはどのようなラフプレーもいとわないとさえ見える気迫に改めて驚ろかされました。日本の場合、どこの国にも技術的、精神的、そして気迫という面は決っして引けは取らないと信じています。が、二度の遠征を通して痛感した事は外人チームと戦うにはやはり体格的に恵まれている方がすべてにおいて有利、という事です。数年後に開催されます選手権では私達の果せなかった夢をきっと果してくれるだろうと信じつつペンを置くことにします。（FP・元大洋デパート）

◇　◇　◇

優勝したユーゴ女子の球史はけっして古いものではない。本格的な強化は一九五〇年代の後半からだ。しかし、初出場した第2回世界7人制（一九六一）でいきなり4位、第3回（一九六四）には準優勝する躍進だった。一九六七年のモスクワ大会が行われていればここで栄冠を握ったかもしれぬが、流会となり、前回（一九七〇）も2位に甘んじた。今回は初めから自信にあふれみごとに男女世界制覇の偉業を遂げた。30才の名GKイストバノビッチ、29才のエース、トルテイのほかは若手が多くモントリオール優勝も夢ではない。日本とは今回の2回を含めユーゴの3戦3勝。

も大切なこの試合に全力を出し切れず敗れた事は本当に残念で、いかなる場合にも動じない「精神力」。この事の大切さをつくづく感じた試合でした。（FP・元大洋デパート）

平均身長170こす上位国

遠征のたびに云われるのは日本とヨーロッパ各国の体力差、体格差である。

コーチングスタッフもつねに〝この差〟の解消に頭を悩ましているようだが、今回も上位国の平均身長は170をこえていた。

優勝したユーゴはルキエ(21才、FP）の179cmを最高に、177cm1人、176cm2人、173cm3人、172cm5人、170cm2人、170cm2人と云う布陣で169cm、164cmという選手が一人いたがウェイティングメンバーだった。

2位のルーマニアは平均身長が171cm、3位のソビエトが172cm、4位のハンガリーが172・2cmと知るとベストフォアへの進出に「170」は一つの条件に思えてくる。

上位で、このラインを割っているのはチェコの169・5cmだが、この国は平均体重が66kgと、参加国のうち最高だ。

ちなみに、日本が勝利を得た西ドイツは168・1cm、オランダは170cmちょうど。

日本選手の平均身長は161cm。このハンデが当分埋まらないとすれば別の活路が求められよう。

世界選手権は4年毎？

ヨーロッパのスポーツ報道関係筋が伝えるところでは、IHF(国際ハンドボール連盟）は、これまで2年おきに開いていた女子の世界選手権を今後は4年おきに改めることを確定したようである。

これは、女子もオリンピックでの実施が定着したことによるものだが、一部では、女子の国際トーナメントは、男子に比べてはるかに少ないため、「4年説」には必ずしも賛成していないと云われる。

またIHFは、女子の普及へ本格的にのり出すことになり、そのPRのために、モントリオールオリンピックでは、「地域」を無視して、次の第6回世界選手権の上位5ケ国に出場権を与え、内容の濃い試合を全世界に見せることを決めている。

第6回世界女子選手権については一九七五（昭50）年の11月または12月に開かれることが内定しており、開催地はモスクワが有力のようだ。

この日程が本決りになると、来春までに地域予選完了が義務づけられそうで、日本協会は、新年度内にアジア予選の実施はさけられないものとみている。

世界女子選手権リポート

多彩な動きでオランダ圧す
～9－12位決定リーグ～

小原名苗

ベストエイトの夢が破れた私たちでしたが12月12日からは気をとりなおし、ノビサッドという町で行われた順位（9－12位）決定戦に臨み、まずオランダと対戦しました。オランダには前回の選手権大会で前半リードしていながら逆転され涙をながした屈辱をはらすため闘志をもやし、試合にのぞみました結果、スコア15－10（前半9－3）で初勝利をかざることができました。十一月下旬にオランダで試合をやり16－10で勝っていることとで、精神的に各自思いきりプレーできたことが勝因にもつながっていると思います。一番の勝因は日本の持味の速攻を生かせたことです。速攻をおせたこともディフェンスが固く、足も動きがよかったからです。オランダは共産国と違い、私達にはやりやすいチームのように思いました。共産圏のチームはロングシュートの威力とくにポストプレイヤーに粘りがあり、必らず7MTをとるプレイヤーがいます。オランダはロング、ポストにもそれほどの強さは感じませんでした。体格差はだいぶん違いますが、オフェンスでは、日本の多彩な動きで充分通用して得点出来ました。しかしディフェンスでは、まだまだ、学ぶことがたくさんあります。ポストプレイヤーに対しての守り方とバックとGKの声の連携が必要だと思いました。予選でルーマニア、ノルウェーに完敗したのも、ポストで7MTをとられたことです。大きいプレイヤーのポストでの粘りのある動きをどうやってつぶすか、日本チームの課題のように思います。日本はどこへいっても応援が多く、試合中ヤーポン、ヤーポンといって声援して貰う事は実にたのもしくそう云ったムードでオランダに勝つことができました。初勝利で忘れることのできない試合です。（GK、元大洋デパート）

東独に守りの弱さつかれる
～9－12位決定リーグ～

蔵田照美

予選リーグでノルウェーに勝ち決勝リーグへ進出出来るものとばかり思っていましたが残念な事に逆に五点差をつけられて、十二月十一日順位決定戦の開かれるノビサットに向かわなければならない結果になってしまいました。

前日のオランダ戦は我々の持ち味速攻を中心に勝利をあげる事が出来ましたが、東ドイツ戦ではとくに長身が多くロングとポストでやられてしまった事が残念でたまりません。この東ドイツのチームは二年前の世界チャンピオンチームでやはりそれだけの強さを持ったチームでした。結果的には十五対十のスコアで負けてしまいましたが試合内容は選手権大会に入ってから一番良い試合ではなかったかと思います。個人々々の持ち味を生かして、着々とコンスタントに得点する事が出来たし気力の面でも充実していたと思います。

残念な事はここでもう一歩ディフェンス力があったらぜったいにこの試合は勝っていると思った場面が再三だったことです。この事は全試合を通じて同じ事が言えると思いますが、極端に言ったら苦労してやっと一点取ったかと思うとその間相手に二点取られてしまうと言った感じです。

相手はフォーメーション的なねらいをもって攻撃して来るわけでもなく、ただ横々にボールを振っているだけのようにしか思えないのですが、シュートモーションやフェントをかけられると相手が大きいばかりについ飛びかかってつぶそうとする。すると、それを待っていたかのようにボールは頭の上からポストに落とされて、かならず7MTに持ちこまれてしまうのです。

先回の世界選手権の反省レポートを読むと誰れもがこのディフェンスの弱点について書いておられました。残念な事に私も又これと同じ事だったと反省しなくてはなりません。

失点内容は、ロングかポストがほとんどなので中途半端に前に出るのではなく、先を読んでボールが来る瞬間早いアタックとポストは正面で守り、きき手をつぶすと、この事ばかり口うるさく言われて練習して来ましたが、いざ試合となると意識してやっても大きい体と力とでほとんどふり切られ

てしまいます。この失点をもっと少なくするには、ポストに入る途中のボールカットが出来るようになったら試合内容もずい分変って来るのではないかと思います。

それにしても、ユーゴ入りと同時に、空港で「今回も是非優勝したい。自信はある」と語っていたという東ドイツが、順位リーグへまわってくるとは思いもかけないことでした、このところ男女とも国際大会のたびに一つ二つの番狂せがあるのは、実力がますます接近したからでしょう。（FP、元大洋デパート）

心強かった観客の声援 対西独
～9―12位決定リーグ～

牧 野 涼 子

二年前オランダにて行われた世界選手権では数回の練習マッチを行いハードスケジュールの中で12勝2敗と好成績をあげ、これなら世界選手権でも確実に6位以内に入れると思っていましたが世界の壁は厚かった。

そして今、決勝リーグ進出の願いも空しく今回の大会の最終戦を9～12位決定戦として戦う……。

二年前の第一戦が西ドイツとでした。あの時はチーム全員が初出場でもありキャリアもなく無我夢中で戦ったにもかかわらず、個々の持味を充分発揮できずゲームセットとなり唇をかんだ思い出があります。ふたたび西ドイツと顔を合せ、お互いにメンバーは多少変っていますが負けられない一戦でした。館内は私達日本に声援を送って下さる観衆で熱気をおび、チーム一同闘志に燃え試合開始のフォイスルと同時に日本のペースでゲームが運ばれました。どの試合でもポストプレーで7MTを取られたり退場したりの苦戦だけにこのゲームではディフェンスに重点を置きフットワークと声の連絡による連けいを一層密にしたのですが、体格的にも体力的にも差があり、ディフェンス時にフットワークするだけで「全体力」を使い果してしまう状態となり、精神力と気力で立ち向うだけでした。

西ドイツは日本の長所、欠点をよく知っていましたが、我々もここにきてようやく個々の持ち前のプレーを発揮できロングシュート、ポストプレー、速攻と充分に力を出し切れたようです。しかしゲームが終了した時は体中の力が抜けて行く様な気さえしました。〝世界〟で勝つことの厳しさを何度も味わされ、それが将来の大発展につながるのだと思います。

いくつかの我々のファインプレーに対し観衆の熱気にみちた声援で何度勇気づけられた事か、あの観衆の「ジャパン」、「ジャパン」と口をそろえて応援して下さった声が今でも強く私の耳朶に焼きついて残っています。大会を終えいくつかの問題点を残し帰国して参りましたが、二度も世界選手権に参加出来ました事、身に付けて来た事を日本ハンドボール界発展の為に役立てたいと思います。（FP・東京重機工業）

観衆の大声援をうけた日本は西ドイツを破り10位を確保した
（西ドイツ「週刊ハンドボール」誌から）

8年ぶりの勝利 世界選手権

9～12位決定リーグ第1日・オランダ戦での勝利は、40年11月ドルトムントで行われた第3回大会の7位決定戦（日本6―5ポーランド）以来世界選手権において実に8年ぶりの白星。

前回（46年）は1分3敗に終っており、垂水、牧野ら7人の連続出場組には〝宿願の一勝〟といえる。

女子の公式戦「30」をこす さびしいアジアの未交流

全日本女子は今回の世界選手権を終って、昭和37年6月西ドイツとの交流（ハノーバー）以来公式国際試合数が通算33戦（11勝21敗1分）となった。

このうち、世界選手権（4回出場＝本大会のみ）での成績は17戦3勝1分13敗で、2勝をマークしたのは今回が初。

国別にみると西ドイツと7戦2勝5敗のほかデンマーク4戦1勝3敗、フランス4戦4勝、ノルウェー3戦1勝1分1敗、ユーゴとルーマニア3戦3敗などが主なところ。

アジア諸国との対戦がいちども記録されていないのはさびしい。
（数字はいずれも本誌調べ）

全日本女子遠征成績

▽第5回世界女子選手権（ユーゴ）
・予選リーグB組

ルーマニア	24	10―4 14―8	12	日本
ノルウェー	16	6―5 10―4	9	日本

・9～12位決定リーグ

日本	15	9―3 6―8	11	オランダ
東ドイツ	17	10―4 7―8	12	日本
日本	13	5―3 8―7	10	西ドイツ

日本＝10位

▽オランダ国際トーナメント（オランダ）

日本	16	7―5 9―5	10	オランダ
日本	14	8―7 6―5	12	ノルウェー

日本＝1位

▽親善試合（※印公式国際試合）

日本	9―9	ニロックHC
日本	28―5	パリ中西部選抜
※日本	18―14	フランス
※ユーゴ	21―11	日本
※ユーゴ	22―13	日本

通算12戦6勝1分5敗

世界女子選手権リポート

工夫しながらの初優勝
～オランダ国際トーナメント～

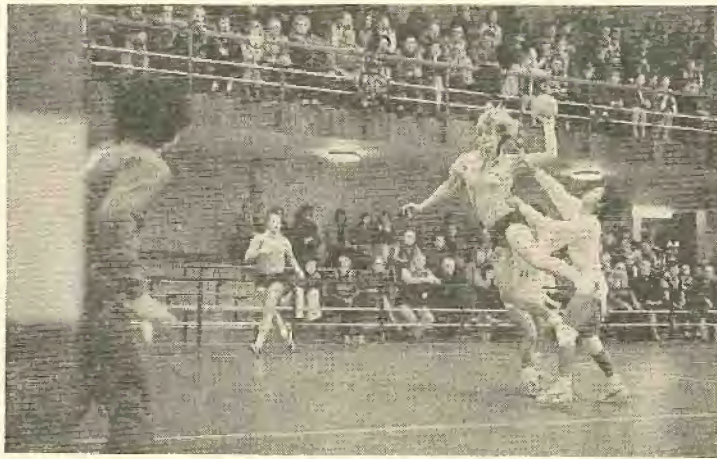
三毛直子

前回の世界選手権開催国オランダに於て行われた国際トーナメントは、参加国日本、ノルウェイ、オランダの三国によって繰りひろげられました。ノルウェイ、オランダとは前の選手権で対戦して負けているだけに、全員が気持ちをひきしめて臨みました。オランダとの第一戦は十一月二十三日午後九時からホーグベーンスポーツホールにて行われました。このゲームでは前後半ともコンビネーションがよく合いミドル、サイド、ポスト、シュートとよく決り順調に加点することができました。これに対してオランダの攻撃は最初長身を利用してポストプレーヤーとのコンビでシュートを打ってきましたが後半日本のディフェンスが締ってきたため単調なシュートに終ってしまいました。結局十六対十で勝ち海外での第一戦、何かと落着かなかったけれども攻撃防禦共よい出来でありました。

第二戦ノルウェイとの対戦は十一月二十四日午後九時半からアーヘムのエスカ体育館にて行われました。この国とは本番で対戦するために最初若手中心でゲームが展開されました。このゲームでは日頃監督から口やかましく言われているポストプレーヤーのつぶしかたを練習するためにトップディフェンスをさげたりして色々工夫してゲームに臨みました。結局十四対十二で勝ち、優勝することができました。この二つの試合を反省して私達の弱点であるポストプレーヤーのつぶし方に色々問題があることを痛感しました。この課題の解決のため全力をあげて練習を続けたいと思います。

【写真は日本×ノルウェー戦】

ところで、前回の遠征の時もそうでしたが、前哨のゲームで好成績をあげ自信をつけても、本大会にはその力どおりに行かないという課題が日本に新しく生まれた感じです。

今回は、私たちもそれを知って六～七分の力で前哨戦を消化したのですが、やはり本大会ではここ一番の強さに押され反省しています。（FP、田村紡）

フランスでの親善試合

高野晴子

オランダで、三国トーナメントの日程を無事終了し、フランスへ移動、パリ空港に一時間足らずで到着、フランスハンドボール協会の指示に従い、市内見物しながらバスでホテルに向かいました。

この中世ヨーロッパの建物の立ち並ぶ、芸術の中心パリで人々は、スポーツに対してどの位の関心を持っているのか、興味を持ちました。しかしそれは間もなく答がでました。ホテルに到着した時、目前に大きなグランドが見え、中にはあらゆる競技のコートが整備されてあり、大人、子供達が一緒になって、午後の一時を過ごしているのです。しかもみぞれ混りの冷たい北風の吹き抜く中で……。

又、市内の至る所の空地にも、ハンドボールコート等が設けられ、子供達の遊んでいる姿が見られました。

ここで改めて、ヨーロッパのスポーツに対する姿勢を、見る事が出来ました。

ところでミーティングではフランス遠征の目的は、世界選手権を控えて、自己のコンディションの調整、勝負に対する気迫、ゲーム中における、フォーメーションの再徹底といった内容を監督さんたちから申しわたされました。

第一戦のパリ地域中西部選抜との試合は、パリ市内からバスで二時間程行ったドルー町。他国のハンドボール関係者の目を気にする事なく、フォーメーション、個々のコンビネーションプレー等を思い切り出す事が出来ました。

一つ気にかかった事は、オーバーステップに対するホイッスルが、日本の場合より早く、フェイントに対しては、一、二歩早くドリブルを使わなければならなく、少々とまどいました。

それから二日後、市内のクーベルタン記念体育館で、対フランスナショナル戦。このチームに対する日本のデーターはほとんどなく、わからないままにゲームが開始されました。驚いた事は、観客の応援の凄まじさ、ゲーム中に個々の声は通らず、ベンチからの指示など全く聞き取れぬままの状態で、前半は一点を争うゲーム展開でした。

しかし後半に入り、館内の雰囲気や、相手の攻撃も読めて、いくつかのフォーメーションが成功し、その他のポイントも重ね、後半は完全な日本ペースとなり、二

勝をあげる事が出来ました。
フランスナショナルチームは、ローリングからの攻撃が主であり、時に見られる速攻等、体格も我に似ているせいか、日本的な攻撃が見られました。
この試合は、コートも狭く、日本の持ち味である速攻が思う様に出ず、今回の遠征の中で一番やりにくかった試合ではなかったかと思います。
遠征の全試合を通じて、特に感じた事は、体格的な面と、彼子達の力強いプレーの数々でした。又、大きな者は、180cm以上、小さい者でも160cm以上もあり、日本ではロングシューターの部類です。試合最中のセットに於いて、GKがほとんど見えず、ディフェンスの間から、見える程度、我々小さい者に取って見えるのは、速攻に出た時位です。少し大げさな表現ですが、それだけに、速攻は我々に取って重要な得点源である事を痛感しました。
又、速攻に出られなかった時のプレーも出来る様に、遠征で学んだ事を取り入れ、今後努力、精進して行きたいと思います。
（FP、日本ビクター）

初めて〃本場〃に遠征して

鳥居君子

11月19日22時30分KLMオランダ航空機は私にとっては初めてのヨーロッパに向けて出発した。16時間余りの機内では、時差による朝昼夜の、めまぐるしい変化。それに伴う数回の食事。初めのうちは、めずらしさの余り、喜んで食べていたものの、その内に嫌気がさし、だんだん食欲がなくなってきた。そして足腰の痛みや時差で心身共にだるく、ボケてしまった。いきなり〃遠征の難しさ〃に出会ったようなものだ。
最初の訪問国・オランダのアムステルダムに着いたのは、11月20日朝方の6時30分。まだ薄暗く吐く息が真白であった。こちらは夜明けが遅く、まだあたりのネオンが鮮やか。日が昇るにつれ、あたりはアムステルダムの町並が美しく、日本の様にビルディングの密集はなく、建物は同じ高さに造られ、茶と白で統一されている。日本ではユネスコ村とか特別にしか見られない建物ばかりであった。

◇

11月23日「オランダ国際トーナメント」が開幕。とにかく驚いたのは外人選手の身長、体格の大きい事。初めての国際試合に臨む私は、話に聞いてはいたもののこの人達を見ただけで圧倒されてしまった。果たして日本でやっているプレーで通用するのか不安だった。
この国際トーナメントに於いても、世界選手権に於いて試合に臨んで強く感じた事は、外人のディフェンスでは、ロングシュートは思いきりジャンプしないと、ゴールが見えないことである。ゴールインしてもゴールインなのか、どうかすぐにはには判らない。こんな試合は国内では絶対経験できないものであると思う。そしてクィックモーションやディフェンスを利用してのアンダーシュートなどは聞いていた通り充分通用した。
外国勢の長身と力を生かしての攻撃、特にポストプレーは男子並のものだった。そしてそれは必ず7MTスローに結びつけていた。ロングや、サイドシュート等も長身を生かしてタイミングをずらしたものが目立った。
ただ全体的にスピードのある速攻には欠けていた様に思った。小さな体で小回りをきかせた突進力とスピードのある速攻こそ日本特有のものであり、これは世界で充分通用するものだと思う。

◇

世界選手権の開催地ユーゴの「ザビドピッチ」は、アムステルダムなどよりさらに寒く一面銀世界で、町は先に訪れたオランダや、フランスの様に華やかな様子

欧州のレセプション

山下恵美子

日本を離れて初めて異国の土を踏む、試合に限らず何をとっても目新しく興味深く感じられました。国際親善の大きな意味を持つレセプションも大いなる期待がありました。ヨーロッパに於ては殆んどの試合が夜行なわれ、その後のレセプションですから、深夜におよぶ事も度々でした。私達が最初に経験したレセプションはフランスでした。日本ではとかく丁寧に相手をもてなし、喜こんでもらうという事で、計画され、準備万端をといった傾向がありますが、ここには私の抱いていた固苦しいイメージは全くなく、いかにも自由で解放的なムードがありました。服装も自由でラフな感じを粋に着こなし、それぞれが自分のおしゃれを楽しんでいるといった感じで、その場の雰囲気に良く合ったものでした。
そのうちにどこからともなく歌が出始め、ギターを片手に自慢ののどを披露、だんだん雰囲気は盛り上がり、ついに席を離れて踊り出したり、歌を端い合ったり、時がたつのさえ忘れてしまいます。お互いに気がねなく、その場の雰囲気を満喫しているという感じは、とても好感が持てました。
ユーゴで行なわれた総合レセプションでは、世界各国のチームが一つの広間に集まり、食事をしながら最後の夜を楽しみました。
地元優勝という事で、一躍国の英雄となったユーゴチームの華やかさに比べ、何となく控えめなルーマニア、どこに行っても明るく陽気な感じのするオランダ等、十二ケ国それぞれのカラーがあり、面白さのあるレセプションでした。私達はぎこちない片言英語に、表現力豊かなジェスチャーを交え、サインやバッジの交換等で、交友を深める事が出来ました。初めて経験するヨーロッパのレセプションの印象は想像以上に自由で明るいものでした。
（FP、元大洋デパート）

世界女子選手権リポート

もない。

　私達は町の人達に大変な歓迎を受け、又試合では観衆は、皆日本を応援してくれ、大変感激し、心強く思った。各地では、いろいろな方々に御世話になりましたが、なかでも特に印象深いのはオランダのハンドボール協会のビムご夫妻。先回の遠征でもお世話になったそうで今回も私達の事で大変気を使っていただいた。

　さらにユーゴに於いてはベスナーさんという女性の通訳の方が大変やさしく、しっかりしておられ、言葉で苦労した私達にとって、とても助かり、また生活面でも和やかな雰囲気を作ってくださった。

　初めてのヨーロッパ遠征で私自身試合では外国選手のプレーを見て世界で通用するプレーというものを、もっと自分なりに習得していかなければならないと思い、そしてこの遠征で体得した数々の事、この経験を生かし、これからさらに頑張っていきたいと思っている。

　最後にこの遠征に関しいろいろお世話下さいました方々に深く感謝致します。（FP・プラザー工業）

ユーゴにおける前哨戦

米　恵美子

　十二月十九日日本を発ち、オランダで開かれたノルウェー、オランダ、日本の三国が出場した三国トーナメントを皮切りに、フランスでの親善試合二試合を含め計五試合を消化し、世界選手権大会の開催地であるユーゴへ入った。ユーゴはチームにとっても私にとっても初めての訪問国であり、入国するまでは前回の遠征の時に立寄ったルーマニアの印象が大変強くユーゴの国にも同じ共産圏のイメージがそのままあるものと思っていたせいかユーゴに着き、まず感じた事は、同じ共産主義国家であるルーマニアに比べいろんな面でかなりの近代化があり、街並の雰囲気も共産圏に見られがちな陰湿さはほとんどなく活気ある明るい町の様子が大変印象的であった。

　本大会までのユーゴでの長期間の滞在の目的はユーゴとの親善マッチを通して本大会でピークの力を発揮できるようコンディショニングの調整、それに優勝最有力候補に日本の力がどれだけ通用するか、また体格、パワーが日本に比べ数段上の外人選手に対する試合慣れ等々であった。十二月三日、ユーゴでの第一戦目をザグレブスポーツホールに於いてユーゴナショナルチームと対戦。日本は若手を中心にゲームを運んだ。3対0と前半最初のうちは日本が先手にまわり好調なすべり出しでゲームが展開したが、ユーゴは日本のスピーディーな動きに面くらったのかミスが目立ち、攻守共に少々もたついていたがすぐに調子をとりもどし、後半はさすが最有力チームらしい貫録が見られ完全にユーゴのペースになってしまった。ユーゴのディフェンスは一線防禦を敷き、日本側のポストプレーは、かたいディフェンスに完全に封じられてしまった短調なロングスタンディングシュートも、長身の大型ディフェンスにはほとんど通らず得点の加算にかなりのくふうを要した。日本の主だった得点は視野外からの走りを利用し早いワンクロスからのタイミングをずらしてのシュートや速攻、またフォーメーションプレイ等……。

　11—21とダブルスコアで敗れたが日本の力がユーゴナショナルチームに対しどの程度のものか、また日本の持味をわずかながらも発揮できたことは、それだけでも大きな収穫だったと思う。

　ユーゴナショナルチームは、二年前オランダに於て開かれた第四回世界選手権大会の際同じ宿舎だった関係で、何度か練習マッチを交えたりし、其の後三年間の間にはずいぶん選手の入替えがあり、前に比べかなりチームが若返っているがチーム力はほとんどおちておらず、むしろ前回の選手権で活躍していたベテランのトルティやパレザノビッチなどのプレイにますます磨きがかけられ、オランダ大会で見たユーゴの力よりははるかに上廻っているように感じた。

　二戦目はザクレブからパラディンへ移動し、十二月五日パラデインスポーツホールで再びユーゴナショナルチームと対戦した。この試合も日本は好調なすべり出しで第一戦に同じく日本が再先制した。前半は何とか点差を開かず必死でくいさがっていったが、後半は完全にユーゴのペースで試合が運ばれた。ユーゴは、ロング・ポストとクイックプレーもうまく使い分け、特に両試合における大きな敗因は日本の弱味である長身者のポストプレーを多用し、ユーゴは得点を重ねたことである。体格差による、そういったハンディキャップをここでも感じさせられた。また、両試合共日本はルーマニアなどの目を意識し、最初の目的の一つである優勝候補に公式戦に於て日本の最高の力をためすことができなかったことは心残りだった。

　ユーゴでの親善マッチを通して感じたことは、日本の弱点である長身プレイヤーに対する守りをさらに強化し、この経験を生かし、次の大会に役立てていかなくてはならないと思う。

　最後にこの遠征で学んだ見聞を生かし、日本ハンドボールの発展の為に役立てていきたいと思っています。（FP、元大洋デパート）

全日本男子、ユーゴに2敗

【速報】第8回世界男子選手権にアジア代表として出場する全日本男子（林達夫団長、北川勇喜監督ら15人）は、2月19日ユーゴに到着、22、24日の両日、ユーゴナショナルと対戦、両試合とももつれあった展開となったが、結局ユーゴが地力を示し、日本は勝ち星をあげられなかった。

　これでユーゴと日本の対戦成績はユーゴの7戦5勝1分1敗。

▽第1戦（ベオグラード）
ユーゴ 36（21—16、15—8）24 日本

▽第2戦（パンチェボ）
ユーゴ 27（15—7、12—10）17 日本

☆★☆★☆★☆

海外トピックス

——杉山　茂——
（NHK運動部）

活発なアメリカ大陸

今シーズン注目されるのはアメリカ、カナダの活発な動きである。

アメリカ地域は、日本が孤軍奮闘するだけのアジア地域と並んで国際ハンドボール界ではマイナーな立ち場にあったが、最近の活動は完全にアジアを抜いている感じだ。

これにはいくつかの理由が考えられるが、なんといっても、2年後、カナダ（モントリオール）でオリンピックが開かれることが大きい。

ホスト国カナダは、無条件でオリンピック出場権が与えられるため、これまで無名のハンドボールにもにわかに関心が強まり、先輩国ともいうべきアメリカで、もっともハンドボールの盛んな地区が、カナダと隣接の北米であったのも幸いした。

「北」の発展へ呼応するかのように、「南」でもブラジルがルーマニア、フランス、スペインなどラテン系諸国の活躍に刺げきされて熱を入れはじめ、アルゼンチン、メキシコも積極的な動きを示しはじめた。カナダとブラジル両国は4月イタリアで開かれるラテンカップトーナメントに出場する予定。

今回の世界選手権には、最終的にアメリカ、アルゼンチン、ブラジルの3ケ国だけとなったが、当初はカナダ、メキシコもエントリーし、アジアをしのぐ勢いを見せた。

アメリカ地域予選は、本誌既報のとおり、昨年11月ヴエノスアイレス（アルゼンチン）のルナ・パークで行われアメリカが攻守に一日の長を示し優勝したが、同予選3日間に動員された観衆は二万二千。最終日のアメリカ×アルゼンチン戦には一万人がつめかけ、この地域では初のテレビ中継も行われた、という。

プロスポーツを頂点に、〝スペクテータースポーツ〟の王国ともいえるアメリカ大陸で、ハンドボールの面白さが理解されはじめたということは興味深い。

なお、昨冬のスウェーデンにつづき、1月末から10日間フランスがアメリカ、カナダ遠征を行い、モントリオール、オッタワ、バハアロー、ニューヨークの4都市を転戦しているが、その記録は次のとおりである。

		前半	後半		
フランス	22	12－10	10－7	17	カナダ
フランス	22	10－12	5－8	13	カナダ
フランス	22	11－11	5－8	13	アメリカ
フランス	28	14－14	6－11	17	アメリカ

ユーゴ得失点差で優勝
〜西ドイツ国際大会〜

世界選手権の前哨戦としてファンの関心を集めた西ドイツ国際トーナメントが1月ミュンヘンなどに4ケ国が集まりリーグ戦で行われた。

大会は、オリンピック優勝国・ユーゴの試合ぶりが中心となったが、第2日闘志を燃やすチェコに大激戦の末、1点差で敗れた。これでチェコが優位に立ったとみられたが、最終日西ドイツに敗れ、3者が2勝1敗で並び、得失点差でユーゴの優勝と決まった。

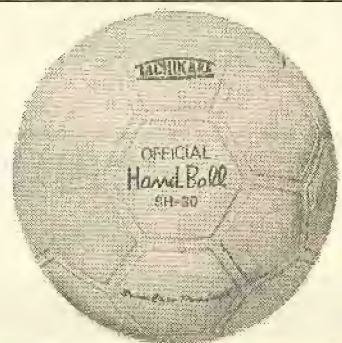
ユーゴの主力はアルスラナジッチ、ゾルコの両GKのほかL・L砲、ミルヤク、ホルバット、ポクラヤクらの来日組、西ドイツもシュミットをはじめブッヒャー、エムリッヒ、ムンク、ベステベ、GKカーターら日本の土を踏んだ名手たちが相変らず元気なプレーを見せた。なお、この大会の得点王は15ゴールしたミルヤク（ユーゴ）とティルダル（ノルウェー）。

		前半	後半		
チェコ	17	6－9	11－7	16	ノルウェ
ユーゴ	21	11－9	10－6	15	西ドイツ
チェコ	19	9－7	10－11	18	ユーゴ
西ドイツ	20	11－8	9－6	14	ノルウェ
ユーゴ	25	15－5	10－9	14	ノルウェ
西ドイツ	20	8－8	12－9	17	チェコ

【順位】①ユーゴ2勝1敗（得失点差16）②西ドイツ2勝1敗（3）③チェコ2勝1敗（マイナス1）④ノルウェ3敗

審判員欠席の珍事

試合開始時間になっても審判員が現れない――草試合ならともかく、れっきとした国際試合、それも世界選手権予選でこのような珍事がおきた。

話はちょっと古いが昨秋11月23日ローマで行われる予定の第8回世界選手権ヨーロッパ地域予選第1群アイスランド×イタリアの2回戦。会場のスポーツパレスには千人の観衆が集まり、両国選手も練習をすませて試合開始を待つばかりとなったが、審判を担当するユーゴのユリック氏とクリスティック氏のうち、ユリック氏の姿がいつになっても現れない。

両国選手はしだいにいら立ち、観衆も騒ぎだしたが時間は経つばかり、イタリア協会は仕方なく予選は後日協議するとして、親善試合に切り替えてこの日は収めた。

ユリック氏は最後まで姿を見せずあとで調べてみると、IHF（国際ハンドボール連盟）からの連絡を旅行中で見ていないことが判った。相棒のクリスティック氏は、会場で当日会えるものだ、と決めこんでいたそうだが、ここらの感覚、日本ではちょっと解りにくい。

イタリア協会はIHFに提訴したり、ユーゴ協会に抗議したり一騒ぎのあと、予選のほうはあっさり"棄権"してしまった。

流行の15分ハーフ国際大会

1試合を15分ハーフに縮め、一日で国際大会を終らせてしまうショートニング・マッチがこのところさかんに行われている。

最近でもパリ・トーナメント、フリョボーグ（西独）トーナメントがこの方式を採った。

パリ大会はパリ選抜、西ベルリン選抜のほかフランス、ルーマニアが出場、ガツ、グネス、キクシド、GKペヌらベストメンバーを送りこんだルーマニアが、3試合で46点（23失点）をあげる強味を示し順当に優勝した。

フリョボーグ大会も南バーデン選抜、FAギョッピンゲン（昨春来日）の地元勢のほか、ソビエトスイス両ナショナルが参加、ソビエトの優勝となった。

このシステムがうけているのは最初から各チームがスパートし、よりスピード感が強まることと、思わぬ波乱が期待できる興味からだ。

パリ大会ではパリ選抜がフランスを8－7で破ってしまったし、フリョボーグ大会でもギョッピンゲンがスイスを6－5で降し、ソビエトにも8－9と善戦、スタンドを興奮させている。

モントリオール五輪の会場　カナダの報道関係がこのほど伝えたところによると、モントリオールオリンピックのハンドボールの主会場としてポール・ソーベセンター体育館が内定した。同体育館は五千人の観客を収容でき、オリンピック（選手）村から2キロほどの所にある。この会場は男女の準決勝リーグ、決勝にあてられ、予選ラウンドはモントリオール周辺の体育館で行われる予定。

首位を行くOSCR　昨秋9月来日した西ドイツ女子・OSCラインハウゼンは、ニーデルハイン地域リーグに属し、今シーズンの試合をつづけているが1月末現在、14戦して10勝3分1敗と好調、首位に立っている。なお、来日チームの主力であったドリブルの名手シュトリービッシと181cmの長身コールテは今季、1部リーグのTW・ギィットンに加って活躍している。一説には両選手は来日時も同クの所属でOSCRに補強されてきたといわれる。

スパルタ－ク・キエフ好スタート

ヨーロッパカップ

男子（第14回）は世界選手権のため、いちじ中断、3月21日からの準決勝で再開する。準決勝の組み合せはセルベナ・ブラチスラバ（チェコ）×VfL・グンメルスバッハ（西ドイツ）、オプサル・オスロ（ノルウェー）×MAI・モスクワ（前回優勝、ソビエト）。

女子（第13回）は1月までに1回戦7カードが終了、シードのフロホベック（チェコ）を加えてベストエイトが出揃った。

連勝を狙うスパルタク・キエフ（ソビエト）はブリュエル・セントゴール（スイス）を相手に16－9、23－7と快勝、好スタートを切った。このほか、アイントラクトミンデン（西ドイツ）がFIF・コペンハーゲン（デンマーク）を、SC・ライプチヒ（東ドイツ）が、IEFS・ブカレスト（ルーマニア）を破った。また、世界選手権優勝国ユーゴの代表ラドニッキ・ベルグラードはルク・ショルゾウ（ポーランド）に第1戦を17－18でとられたが、第2戦は18－14で勝ち辛くも進出した。

ルーマニア、中国遠征か

渡辺和美日本協会副会長は2月20日東京で「今夏、ルーマニアのチームが中国へ遠征して北京などで試合をするようだ」と語った。

この情報は、同副会長がIHF（国際ハンドボール連盟）理事として、世界男子アジア予選の視察（テルアビブ）に赴いた際、同席したI・クンストIHF技術委員（ルーマニア）から聞き出したもので、遠征するチームは、ルーマニア学生選抜（世界学生1位）ではないかという。IHFは、未加盟国との交流を禁じているが、加盟の意思をもつか、その準備中の国とはさしつかえないとの見解をとっている。

日本協会では中国がこれを機会に国際舞台への登場についてなんらかの動きを示すのではないかとみて注目している。

なお、ルーマニアは昭和35年6月日本遠征の途次、ナショナルチームが中国へ立ち寄り、2戦（2勝）した実績がある。

ラインハウゼン残燭

久田　暁
（日本協会国際担当理事）

昨秋来日した西ドイツ・ラインハウゼン・ハンドボール女子チームは今なお私に「女子ハンドボール」のあり方について考えさせるものを残している。スポーツには低頂点強化の面とは別にレベルは低くても真剣にかつ楽しくという広い層を対象とした面がある。そして日本の女子ハンドボール界を眺める時この面の欠如が目立つのではないだろうか。ほんとうに気楽にとりくめるハンドボールが陽の目を見ないので普及はあっても人気がない。目立つのは死に物狂いで勝負を競っている実業団、大学、高校のエリートチームばかりである。少年やお嬢さんたちにもできるハンドボールはやる方も指導する方も様々な壁にぶっかかり坐折することが多いのではなかろうか。

たしかにハンドボールにはテニス、卓球、バレーボールのようなとびつき易さがないかもしれないが、握力や脚力の劣っている者にも楽しめ、除々に上達させる道があって然るべきだと思う。ラインハウゼンの楽しげなハンドボールはその練習日程や目標をきけばなるほど日本の女子実業団のトップチームの相手ではない。大学の女子かOGのクラブチームとの対戦がよりふさわしく、そのシリーズの中に一試合全日本レベルの対戦を組んでみたらおもしろかっただろうと思う。残念乍ら現状では実現のむずかしいことだが。彼女らはベテランのグラーベン老監督に率いられハンドボールを通じて文化的交流を強く希望し試合後のレセプションや観光において歌い踊り、共通のテーマについてデスカッションも熱心に東洋のめずらしい物事に研究的まなざしを注いだ。我々は彼らのペースにまきこまれいつのまにか国際理解と友情を深めて行くのだった。気楽に日本を転戦しながらも規律を守りまじめなチームだった。仕事(勉強)と家庭生活のバランスをくずさない範囲で美容と健康と友だち作りのために家族ぐるみでラインハウゼンのクラブに集まり楽しくハンドボールをやる、大きな大会にはその中でのベストメンバーで代表チームを送り出す。学校、職場中心の日本スポーツ界の体質ではあまりまねのできないことだ。日本でのいわゆるクラブチームが日の当たらないのもこのためかもしれない。今後のスポーツ人の努力と社会のスポーツへの理解を早めることが必要だろう。「あんなしんどいもの（ハンドボール）ようやってまんな」。「ハンドボールよりももっと女の子らしいスポーツをしなさいといわれているので…。」女子のハンドボール選手でも「全日本を見に行かない？」「女子はつまらないから男子の試合を見ましょうよ」。若い女の子のこんな会話を耳にしてハンドボールマンとしてショックをうけるのである。学生リーグに登場するのも体育系大学の女子部ばかりである。女子ハンドボール＝男子並みの体力、この印象が日本では強すぎないだろうか。このままでは女子の種目としてのハンドボールはあまりにもかわいそうだし、我々ハンドボールをやった者として肩身が狭い。学校対抗、企業対抗の意識が強すぎることがハンドボールの気軽な愛好者を近づけさせないとすれば、バレー、サッカーなどの広いファン層はどうして生まれたのだろうか？　チームスポーツとしてのハンドボールに「ハンドボールが好き、ハンドボールをやってみたいわ。」というファンを生む方法を真剣に創り出すべき時期であろうと思う。第8回世界選手権アメリカ予選に二万二千の観衆(3日間)がブエノスアイレスの競技場に集ったと近着のIHF公報は伝えている。ハンドボールは決してつまらないスポーツではない証拠だ。一般ファンや同好会そして部が一体となって頂点を支えるハンドボール構成の実現をめざしてがんばって行きたいもので、ラインハウゼンの来日と姿はその一つの教訓になるのではなかろうか。（カット写真はラインハウゼン×大崎電気戦・48年9月18日、東京駒沢）

男女とも福島勢が勝つ

各地の記録

第10回東北総合室内選手権は1月26、27の両日山形県体育館に男子12、女子11チームが参加してトーナメントで行われた。

男子は、前回優勝の青森クを準決勝で降したSGク（福島）が余勢をかって、決勝でも3度目の優勝を狙う岩手教員クを巧みに制して勝ち初優勝をとげた。福島代表の優勝は第2回の福島教員ク以来のこと。

女子は、事実上の決勝とみられた準決勝・東北ムネカタ（福島）×全和洋（秋田）で勝った東北ムネカタが、決勝は若い涌谷高（宮城）を押しまくり2年連続3度目の優勝を飾った。福島県の男女優勝は初。

▽男子1回戦
東根球友会（山形） 13（6-4, 7-4）8 仙台育英高（宮城）
SGク（福島） 19（10-4, 9-4）8 下北手ク（秋田）
岩手教員ク（岩手） 25（13-5, 12-8）13 青森商高（青森）
宮城教員（宮城） 24（10-10, 14-6）16 大石田高（山形）

▽同準々決勝
青森ク（青森） 14（6-7, 8-4）11 東根球友会
SGク 25（12-3, 13-5）8 盛岡商高（岩手）
湯沢高（秋田） 22（11-4, 11-8）12 宮城教員
岩手教員ク 17（1-0, 2-1, ……, 7-7, 7-7）15 聖光学院工高（福島）

▽同準決勝
SGク 13（7-5, 6-3）8 青森ク
岩手教員ク 14（8-6, 6-7）13 湯沢高

▽同決勝
SGク 14（6-7, 8-3）10 岩手教員ク

▽女子1回戦（3試合）
全青森西高（青森） 7（3-2, 4-3）5 岩手女高（岩手）
古川女高（宮城） 5（0-1, 5-1）2 竹田女高（山形）
石川高（福島） 9（6-0, 3-1）1 米沢女高（山形）

▽同準々決勝
東北ムネカタ（福島） 10（4-1, 6-1）2 全青森西高
全和洋（秋田） 17（7-2, 10-2）4 古川女高
大曲農高（秋田） 10（5-4, 5-4）8 花巻南高（岩手）
涌谷高（宮城） 9（4-1, 5-3）4 石川高

▽同準決勝
東北ムネカタ 6（4-3, 2-1）4 全和洋
涌谷高 8（2-4, 6-1）5 大曲農高

▽同決勝
東北ムネカタ 10（5-3, 5-0）3 涌谷高

岡山教員、柏会振り切る

▼岡山県一般室内選手権（1月・岡山県営体育館）＝男子のみ

▽1回戦（2試合）
岡山大 13-4 岡山教員B
児島柏会 27-10 天城OB

▽準決勝
岡山教員 16-10 岡山大
児島柏会 16-12 倉商OB

▽決勝
岡山教員 17（7-7, 10-8）15 児島柏会

佐世保北高OB勝つ

▼第6回長崎県室内総合選手権（1月・長崎工）

▽一般男子1回戦（3試合）
長龍会 16-7 海自二群
佐世保ク 17-7 北星会
佐世保北高OB 30-14 海自佐世保

▽同準決勝
佐世保ク 18-14 長龍会
佐世保北高OB 34-9 大村航空隊

▽同決勝
佐世保北高OB 26（13-6, 13-8）14 佐世保ク

▽高校男子準決勝
長崎工 10-9 国加
国加 42-2 大村H・S

▽同決勝
国加B 30（17-4, 13-2）6 長崎工

男子で一条が進出

▼奈良県高校選手権（兼新人戦、1月・奈良高）

▽男子準々決勝
一条 22-4 桜井商
添上 20-3 郡山
東大寺 7-3 榛原
生駒 7-4 奈良

▽同準決勝
東大寺 7-2 生駒
一条 10-9 添上

▽同決勝
一条 13（1-4, 7-1）5 東大寺

▽女子1回戦（2試合）
桜井商 5-1 十津川
一条 6-5 郡山

▽同準決勝
桜井商 5（延）4 生駒
添上 4-2 一条

▽同決勝
添上 12（4-0, 8-0）0 桜井商

▼第13回長野県総合選手権（2月 北佐久農高）

▽男子準々決勝
上田ク 18-13 佐久ク
かつらお 23-16 小諸商3H
上田高 21-3 小諸商高
北農高 13-9 屋代高

▽同準決勝
かつらお 17-12 上田ク
上田高 7-4 北農高

▽同決勝
かつらお 18（1-0, 1-1, ……, 7-11, 9-5）17 上田高

▽女子1回戦（3試合）
美須々丘高 11-5 城南高
小商ク 不戦勝 仙禄ク
小諸商高B 26-2 佐久高

▽同準決勝
小諸商高 12-8 美須々丘高
小諸商高B 11-8 小商ク

▽同決勝
小諸商高 22（10-8, 12-10）18 小諸商高B

▼第13回富山県一般男子室内選手権（2月・富山市体育館）

▽1回戦（2試合）
富山大 18-8 二上OB
富山教員 21-12 八尾OB

▽準決勝
氷見ク 19-9 富山大
想球会 15-10 富山教員

▽決勝
氷見ク 27（5-4, 22-6）16 想球会

女子はいぜん青森西

▼第4回青森県教育長杯争奪高校選手権（1月・弘前市民体育館）

▽男子準々決勝
柏木農 17-13 青森東
青森商 15-14 鰺ケ沢
弘前南 19-8 青森商B
三本木 15-11 青森

▽同準決勝
青森商 10-8 柏木農
三本木 12-6 弘前南

▽同決勝
青森商 16（8-7, 8-6）13 三本木

▽女子1回戦（3試合）
七戸 6－5 鯵ケ沢
青森西 8－3 青森
柏木農 12－10 三本木
▽同準決勝
七戸 7－6 野辺地
青森西 9－2 柏木農
▽同決勝
青森西 16（8－2、8－0）2 七戸

前橋ピジョンズ順当勝ち

▼第14回群馬県総合選手権（1月・前橋商体育館）
▽男子準々決勝
OB前橋工 30－13 相馬原白衛隊
OB富岡高 22－14 前橋商高
群馬教員 30－16 OB前橋商
富岡高 22－18 光電工業
▽同準決勝
OB前橋工 19－18 OB富岡高
群馬教員 35－23 富岡高
▽同決勝
群馬教員 28（16－8、12－16）24 OB前橋工
▽女子準々決勝
前橋市女高 17－3 群馬女短大付
下仁田高 11－2 前橋商高
桐生女高 21－2 高崎女高
前橋ピジョンズ 14－3 OG前橋東商
▽同準決勝
下仁田高 6－4 前橋市女高
前橋ピジョンズ 11（延）10 桐生女高
▽同決勝
前橋ピジョンズ 14（4－3、10－4）7 下仁田高

コンドル、海自下総制す

▼第6回竜ケ崎市（茨城）大会（1月・竜ケ崎一高）
▽男子準々決勝
コンドル 19－8 竜ケ崎一高
新治ク 10－9 土浦ク
竜ケ崎ク 15－11 土浦工高
海上自衛隊下総（千葉） 20－9 川口工高（埼玉）
▽同準決勝
コンドル 16－10 新治ク
海自下総 18－11 竜ケ崎ク
▽同決勝
コンドル 13（6－5、7－5）10 海自下総
▽女子決勝
水海道二高 11（4－3、7－1）4 竜ケ崎二高

四日市工、抜群の強さ

▼三重県高校新人大会（1月・四日市体育館）
▽男子準々決勝
四日市工 23－1 亀山
津 11－5 尾鷲
津工 25－7 海星
高田 10－8 四日市
▽同準決勝
四日市工 19－8 津
津工 15－11 高田
▽同決勝
四日市工 27（13－4、14－3）7 津工
▽女子準々決勝
津女子 15－1 上野商
菰野 7－6 亀山
尾鷲 8－3 津
四日市 8－3 暁
▽同準決勝
津女子 18－2 菰野
四日市 16－8 尾鷲
▽同決勝
津女子 10（4－1、6－1）2 四日市

大同製鋼ついに12連覇

▼第29回愛知実業団リーグ（1月・名古屋市体育館）
▽男子1部
大同製鋼 21－12 トヨタ車体
大同製鋼 30－1 豊田工機
新日鉄名古屋 27－7 トヨタ自工
トヨタ車体 22－14 新日鉄名古屋
新日鉄名古屋 24－4 豊田工機
トヨタ車体 24－9 トヨタ自工
トヨタ自工 15－12 豊田工機
大同星崎 16－13 トヨタ車体
大同製鋼 20－14 新日鉄名古屋
トヨタ車体 25－4 豊田工機
大同星崎 19－6 トヨタ自工
大同星崎 25－9 豊田工機
大同製鋼 21－20 大同星崎
大同製鋼 31－11 トヨタ自工
新日鉄名古屋 11（分）11 大同星崎
【順位】①大同製鋼5戦全勝＝12回連続、通算14度目の優勝②大同星崎3勝1分1敗③トヨタ車体3勝2敗④新日鉄名古屋2勝1分2敗⑤トヨタ自工1勝4敗⑥豊田工機5敗
【男子2部順位】①三友工業③プラザー工業③日本碍子④豊田織機⑤中部電力⑥アイシン精機⑦三菱自動車⑧パイロットインキ
▽同1・2部入れ替え戦
三友工業（2部） 17－11 豊田工機（1部）
▽女子
プラザー工業 19－3 豊田工機
プラザー工業 24－5 伏原紡績
伏原紡織 11－6 豊田工機
プラザー工業 19－2 伏原紡織
豊田工機 7－3 伏原紡織
プラザー工業 23－2 豊田工機
【順位】①プラザー工業4戦全勝②伏原紡織1勝3敗（得失点差マイナス35）③豊田工機1勝3敗（マイナス38）

男子は函館勢上位に

▼全北海道高校新人大会（48年12月・室蘭工高）
▽男子準々決勝
函館有斗 10－9 札幌南
室蘭工 14（分）14 札幌北陵
抽せんで室蘭工の勝ち
函館大谷 19－3 室蘭栄
室蘭清水 14－10 旭川東
▽同準決勝
函館有斗 20－8 室蘭工
函館大谷 16－4 室蘭清水
▽同決勝
函館有斗 12－9 函館大谷
▽女子決勝
登別 4－2 室蘭商

那覇商OBが初優勝

▼第3回沖縄県一般OB大会（48年12月・那覇商）
▽1回戦（2試合）
知念OB 12－11 小禄OB
首里OB 19－11 沖縄OB
▽準決勝
那覇商OB 10－9 知念OB
興南OB 17－13 首里OB
▽決勝
那覇商OB 27（10－8、17－7）15 興南OB

▼第9回宮城県ハンドボール祭（1月20日・宮城スポーツセンター）
▽高校
男・東軍 15－13 西軍
女・西軍 18－3 東軍
▽一般
OB西軍 6－7 OB東軍
一般女子選抜 5－5 高女新人軍
▽小学生招待試合
台原小 11－0 附属小
▽学生
東軍 18－15 西軍
▽メインカード（男子）
宮城教員 14（7－4、7－9）13 宮城県一般選抜

本誌購読料2300円（年額）に

本誌8頁で所報のとおり日本協会は本誌の購読料（送料共）を次号から

年　額（11回発行）　二、三〇〇円

一冊価　二五〇円

と改訂することになりました

御承知のように巷間の物価高騰は、日本協会の全事業に影響を与えています。そのなかでも機関誌「ハンドボール」の発行経費は、予想される郵送料の値上げなどを試算すると、これまでの価額では健全な刊行ができぬところまで追いこまれ、読者の皆さまには負担とは存じますが、値上げのやむなきに至りました。

何とぞ、日本ハンドボール界で唯一のコミュニケーションとして読者の支持も増えつつある本誌を、今後も継続できるようご理解の上、ご了承下さい。

また、日本協会登録と同時に購読の義務づけがない「一般C」チーム各位にもおかれましても、つとめて購読いただきますようお願いいたします。編集スタッフもなおいっそう誌面の充実につとめ、皆様の期待する内容をお届けするつもりです。

京都産大、伏見ク破る

▼第18回京都府室内選手権（2月京都市体育館）

▽男子準々決勝
塔南OB 19−13 竜谷大
星友会 25−16 洛北ク
伏見ク 19−5 鴨沂ク
京都産大 14−13 産大ク

▽同準決勝
伏見ク 16−8 塔南OB
京都産大 17−8 星友会

▽同決勝
京都産大 13（6−4、7−5）9 伏見ク

▽女子1回戦（2試合）
精華OG 25−1 嵯峨野ク
篁会 10−3 微清会

▽同準決勝
精華OG 19−2 西京OG
全明徳 12−8 篁会

▽同決勝
全明徳 12（5−7、7−3）10 精華OG

宿敵同士、日新勝つ

▼第3回広島県総合一般室内選手権（2月・広島県立体育館）

▽男子準々決勝
日新製鋼呉 22−10 日本鋼管福山
菊翔会 15−9 広島県教職員
修道ク 11−10 海上自衛隊呉
三菱レ大竹 15−12 呉同好会

▽同準決勝
日新製鋼呉 26−8 菊翔会
三菱レ大竹 12−11 修道ク

▽同決勝
日新製鋼呉 10（4−3、6−6）9 三菱レイヨン大竹

▽女子決勝
山陽女高OG 9（4−1、5−4）5 広島一女商OG

中学大会記録

◇長崎・第6回総合選手権中学の部（1月、長崎工）＝参加、男子のみ5校
戸町 12−2 小島
深堀 10−9 大野
玖島 17−10 戸町
深堀 20−6 小島
玖島 15−13 大野

◇茨城・磯部林トーナメント（11月・麻生高）参加男＝11、女＝8

▽男子準々決勝
麻生一 19−5 千代田
茎崎 8−3 結城
岩瀬西 12−6 玉造
水海道 10−7 小川北

▽同準決勝
麻生一 17−6 茎崎
岩瀬西 13−4 水海道

▽同決勝
麻生一 22（9−5、13−4）9 岩瀬西

▽女子準々決勝
北浦 10−4 結城
玉造 16−3 稲田
岩瀬西 6−5 波崎一
千代田 4−3 水海道

▽同準決勝
玉造 9−6 北浦
千代田 9−8 岩瀬西

▽同決勝
玉造 14（5−5、5−5、…、1−1、3−1）12 千代田

◇沖縄・第2回県中学選手権（11月・仲西中）

▽男子準決勝
上山 10−9 首里
古蔵 11−10 美里

▽同決勝
上山 11（6−2、5−4）6 古蔵

▽女子準決勝
古蔵 11−6 仲西
安岡 14−2 具志頭

▽同決勝
古蔵 6（4−1、2−2）3 安岡

◇名古屋・市新人大会（11月）参加、男＝17、女＝13

▽男子準々決勝
明豊 19−3 港北
東港 12（延）7 笹島
桜田 10−2 天白
名塚 15−2 千種台

▽同準決勝
明豊 14−7 東港
桜田 12−7 名塚

▽同決勝
明豊 6（4−5、2−0）5 桜田

▽女子準々決勝
名塚 16−2 桜山
桜田 14−0 東港
明豊 11−4 猪高
笹島 19−8 港北

▽同準決勝
桜田 10−3 名塚
笹島 記録不明 明豊

▽同決勝
桜田 9（3−2、6−3）5 笹島

大同製鋼の無敗記録止まる

【速報】第13回東海室内選手権（2月24日・名古屋）の男子決勝で全日本4冠王の大同製鋼(愛知)は、主力5人を世界選手権に送りこんだ痛手から、本田技研鈴鹿(三重)に12−15で敗れ、47年12月10日の大崎電気（埼玉）以来つづけていた対国内チーム無敗記録（77戦74勝3分）に終止符を打った。

男女とも玉南中優勝　熊本県中体連

【訂正】本誌前号（115号）32頁「各地の記録・中学大会記録」のうち、熊本県中体連大会の決勝スコアは男子が玉南中8−8松橋中の引き分けで両校ともに2度目の優勝、女子は玉南中13−9氷川中で玉南中4度目の優勝の誤りでした。お詫びして訂正します。

合 織 糸 ・ 合 織 混 紡 糸

田村紡績株式会社

社 長 田　村　正　衛

四 日 市 市 東 茂 福 町 10 ― 17
T E L 0593―65―2156 (代表)
郵便番号　5 1 2

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第一一七号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
昭和四十九年二月二十五日印刷 発行所 日本ハンドボール協会
昭和四十九年三月一日発行
東京都渋谷区神南一ー一ー一
電話 大代表(467)三一一一
振替東京五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助
定価 二百円
(年間購読料千八百円)